

FELDA (マレーシア) オイル・パーム 入植地における栽培組織と所得配分

——ブロック・システムの実態調査事例——

ほり い けん そう
堀 井 健 三

はじめに

- I FELDA 入植計画——事業の成果
- II 調査入植地の概要
- III ブロック・システムの基本枠組
- IV 入植者の所得水準
- V 要約と問題点

はじめに

これまでマレーシア連邦土地開発公団 (Federal Land Development Authority, 以下 FELDA と記す) が行なってきた大規模な入植計画については概要書や解説書が多々あり、また論文や報告書も、修士・博士論文を含めると、非常に数に達する。また FELDA 自身もこれまで数多くの年報、調査書、雑誌等を刊行してきている。しかし、残念ながらこれら膨大な資料や論文、著書は FELDA 全体の計画を概念的に説明したものが多い。もちろん、なかには労働移動、土地所有、社会構造、教育、リーダーシップといった側面から問題を取扱った論文もあるが、筆者がもっとも知りたいと思っていた入植者の具体的な日常生活の様子、とりわけ栽培作業の仕組みや土地相続の問題とその処理方法 (マレー人はイスラム法または慣習法にもとづく均分相続が一般的だが、FELDA 内では一子相続が原則であり均分相続は認められていない)、次世代の労働

働力流出等々について分析した論文はきわめて少なく、かつその内容は不十分である。ために、これまで入植者の日々の生産活動の仕組みや彼らが直面している問題点について明確なイメージを掴むことができず、漠然とした FELDA 像しか描けなかった。

今回、筆者は FELDA 入植地の実態調査を長期にわたって行ない初めて入植者たちのなまの生活、生産活動に接触する機会をえることができた。調査は1981年6月から11月までの延べ5カ月間行なわれ、この間入植地事務所や入植者開発組合 (Jawatan-Kuasa Kemajuan Rancangan, JKRR)、協同組合等々から資料を収集するとともに、入植者とのインタビューも行なった。実態調査はペラ州のスンゲイ・クラ (Sungei Klah) 入植地 (ゴム) とトゥロラック・ウタラ (Trolak Utara) 入植地 (オイル・パーム) とで行なわれたが、今回は紙幅と時間の関係からオイル・パームを栽培する後者の調査事例をとりあげ、その一部を紹介するにとどめる。

FELDA 入植地は伝統村落社会とはことなり、周辺社会から隔離された一つの完結した小世界といった様相を持ち、そこでは経済、政治、社会、教育、文化等入植者のあらゆる日常生活、生産活動が営まれている。本論文は現在の FELDA オイル

ル・パーム入植地の経営方式の核心とも言えるべきブロック・システム (block-system) の実態の解明に焦点が置かれている。ブロック・システムとは入植者をグループ分けし、その内部で協力的な栽培作業組織と平等的な所得配分方式を実現しようとする組織の経営理念であるが、その実態については全くといってよいほど、明らかにされてこなかった。筆者の目的はトゥロラック・ウタラ入植地の調査事例を通じて、このブロック・システムの実態の一端を明らかにしながら、その組織的特質と問題点の所在を指摘、整理することにある。

FELDA の入植地は地域、開拓時期により、また各入植地が入植者の意向を勘案しながら経営方針をきめるため、各入植地の組織運営はかならずしも同一ではない。したがって、ブロック・システムのあり方も決して画一的でなく、入植地によりまたブロックによりその具体的なあり方はことなるのである。そう言った点からいえば、今回の調査事例からブロック・システムの実態、特質について一般的な結論を引き出すことに慎重でなくてはならないであろう。多様なブロック・システムの内容を理解するには今後さらに FELDA 入植地の実態調査を続けることが必要と思われる。

I FELDA 入植計画

——事業の成果——

FELDA は1956年、マレーシアが独立 (1957年) する1年前に当時農村に大量に存在した土地なし農民および小作農を入植地に吸収し、自作農を創設することを目的として設立されたものである (注1)。その後、FELDA は事業の進展に伴い組織体として大規模な変革をいくどか経験し、また具体的な入植事業の運営・経営方針も幾回となく試

行錯誤をくり返しながら改善され、今日の FELDA にまで成長してきた。もちろん、FELDA が成長してきた歴史的経緯を分析することは FELDA 理解のために必要欠くべからざることであるが、ここでは論点をできるだけオイル・パーム入植地で現在遂行されているブロック・システムの実態描写にしばるためにそれらを割愛し、これまでの FELDA 入植事業の成果に簡単に触れるにとどめる。

第1表は1980年現在、FELDA によって開発された栽培作物別入植地数と開発面積、および入植家族数を示したものである。この表から容易にわかるように、FELDA 計画に占めるオイル・パーム入植地の地位は非常に高く入植地数、栽培面積、入植家族数のいずれにおいてもゴムを上回り、60%近い比率を示している。もっとも、第2表にみるように FELDA 発足当初はゴム栽培に重点が置かれ、オイル・パームの栽培が FELDA で開始されたのは1961~65年間からである。これは国際商品農産物が価格不安定性によって生ずる損失と危険とを防ぐための栽培作物多様化政策と当時のオイル・パームの有利な国際市場価格を反映したものである。その結果、以後、年々オイル・パームが FELDA の戦略的農産物としての位置を占めるようになり、現在にいたっている。これに反してゴムは1966~70年に新規開発入植地が極端に減少して以来主役の座をオイル・パームに譲ったが、その後もほぼ一貫してオイル・パームについて FELDA の主要栽培農産物としての地位を維持し続けている。なお、砂糖キビ、ココア、コーヒー等はいずれも70年以降栽培され始めたにすぎない。ココアは1976~80年間に10カ所の入植地で栽培されているが、一般にこれら農産物は土壌条件に適した改良品種が十分に開発されていないた

第1表 栽培作物別にみた入植開発地数，栽培面積および入植家族数
(FELDA, 1980年現在)

	入植地数		栽培面積 (エーカー)		入植家族数	
		%		%		%
オイル・パーム	162	56.6	758,054	58.5	36,261	56.6
ゴム	111	38.8	417,415	32.2	27,172	42.4
ココア	10	3.5	35,200	2.7	446	0.7
砂糖	2	0.7	14,177	1.1	184	0.3
ココヒ	1	0.4	1,709	0.1		
居住地区*	—	—	70,205	5.4		
合 計	286	100	1,296,760	100	64,063	100

(出所) *Annual Report, FELDA 1980.*

(注) * 入植者および入植地事務所に勤務する職員の住宅地その他公共施設のため使用されている面積で，町/村 (town/village) として年報では記述されている。

第2表 年代別にみたゴム，オイル・パーム
入植地数と開発面積

年	ゴム		オイル・パーム	
	入植地数	面積 (エーカー)	入植地数	面積 (エーカー)
1956~60	14	14,600	—	—
61~65	37	87,360	9	27,409
66~70	5	45,865	25	133,186
71~75	22	111,987	60	288,067
76~80	34	135,825	69	313,067
81~82	12	29,214	28	133,357
合 計	124	424,851	191	895,086

(出所) Jamaludin bin Lamin, "Land Development and Agriculture," クアラルンプール, FELDA, 1982年8月12~14日にクアラルンプールで開催されたシンポジウム "The State of Malaysian Agriculture: A Critical Review" (Agricultural Institute of Malaysia 主催) に提出された論文の第5表を整理したもの。

め，生産性が下降線を辿る傾向が見られ入植者にかならずしも満足した所得を保証しえず，FELDAの主要農産物となりえていない。

つぎに FELDA 入植地の地域分布をみると1977年現在 (第3表) で，ゴム，オイル・パームを含めた総入植地数211のうちパハン(Pahang)州，ジョホール (Johore) 州，ヌグリ・スンビラン (Negeri Sembilan) 州等の内陸の丘陵または山岳地帯と東海

第3表 州別入植地数 (1977年現在)

州 名	入植地数	面積 (エーカー)	入植家族数
ペルリス	1	9,871	179
ケダ	8	19,393	1,713
ベラン	11	48,964	2,599
セランゴール	4	21,506	1,885
ヌグリ・スンビラン	26	124,819	5,773
マラッカ	5	11,727	1,267
ジョホール	49	203,622	11,003
パハン	91	408,048	18,923
トレングア	13	58,966	2,465
クランタ	3	12,565	257
合 計	211	919,481	46,064

(出所) *Annual Report, FELDA 1977*, 12ページの表 "Agricultural Development as at End of 1977" より整理したもの。

岸部にそれぞれ91, 49, 26カ所と集中しており，マラッカ (Malacca) 州，ペラ (Perak) 州およびケダ (Kedah) 州といった西海岸沿いの諸州には各5, 11, 8カ所と比較的少ないのが特徴である。これはもちろん，1890~1920年代のイギリスを中心としたヨーロッパ系資本による大規模エステート農園が地形，地味条件のよいマレー半島の西海岸沿いを中心に開発されたことを反映しており，一方 FELDA が比較的開発条件の悪い地域を開拓し続けてきたということを意味している。

第4表 エステート、公団、小農別にみたオイル・パームの栽培面積、
生産量および単位面積当り生産性 (1978年12月現在)

	栽 培 面 積 (ha)	収 穫 面 積 (ha)	生 産 量 (トン)	生 産 性 ³⁾ (トン)
	%	%	%	
エ ス テ ー ト	438,938 (55.8)	333,950 (67.5)	5,412,785 (79.7)	16.21
FELDA	282,830 (35.9)	154,120 (31.2)	1,326,903 (19.5)	8.60
RISDA ¹⁾	25,650 (3.5)	3,530 (0.7)	10,235 (0.2)	2.90
FELCRA ²⁾	10,940 (1.3)	3,082 (0.6)	39,637 (0.6)	12.86
州入植開発計画および小農	29,580 (3.7)	n. a	n. a	n. a
合 計	787,938 (100)	494,682 (100)	6,789,560 (100)	13.73

(出所) Malaysia, Department of Statistics, *Malaysia Oil Palm, Coconut, Tea and Cocoa Statistics*, 1978, の第12表 (22ページ) と第32表 (44ページ) から整理作成したもの。

(注) 1) Rubber Industry Smallholders Development Authority. もともとは小規模ゴム栽培農家の再植補助の指導と財政資金補助を交付する機関であったが、現在ではオイル・パームもその活動範囲に入っている。

2) Federal Land Consolidation and Rehabilitation Authority.

3) エステート (100 エーカー以上の大規模農園) とその他公団との間に単位面積当り生産性に大きな差がみられるが、これにはオイル・パームの樹齢構成を考慮に入れねばならず、実際には数字で示されているほど、生産性差があるわけではない。

つぎにマレーシア全体のオイル・パーム産業における FELDA の位置を統計で確かめておくことにする。第4表にみるごとく1978年現在、オイル・パーム総栽培面積のうち FELDA の占める比率は35.9%、収穫面積で31.2%また生産量では19.5%となっており、エステートについて大きな位置を占めているのがわかる。このことはまた国民所得や輸出の面でも重要な役割りを FELDA が果たしていることを意味し、農業政策としてだけでなく経済政策全体のなかで重要な位置を占めていることを示している。特に農村地域にマレー人の中産階級を多量に産み出しマレーシアの政治安定に貢献してきているという点では FELDA の役割は大いに評価してよいであろう。

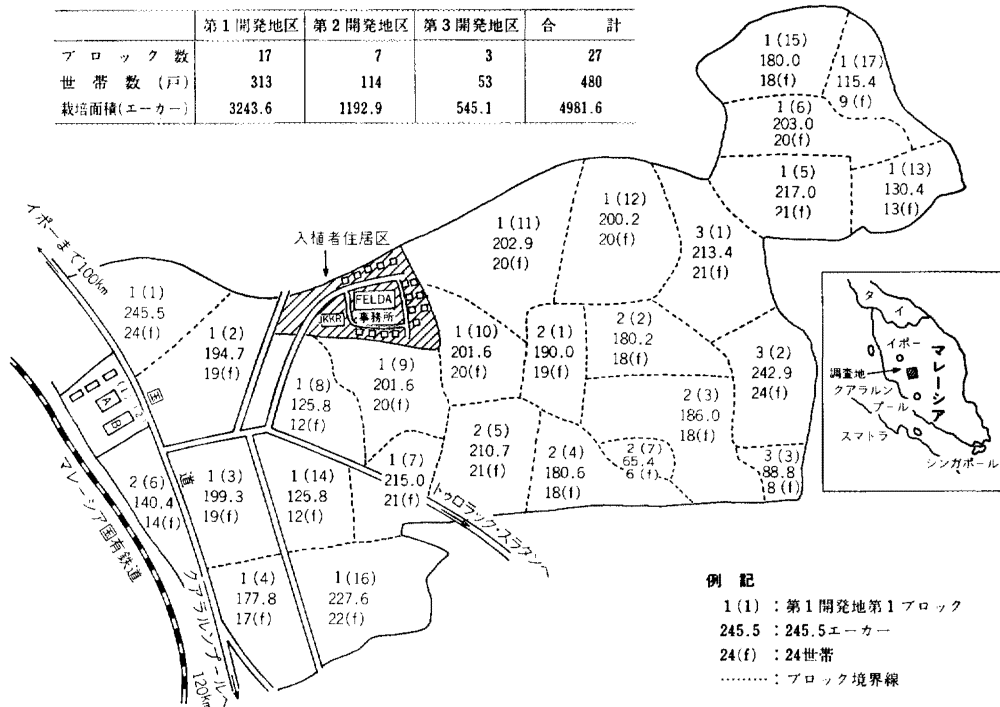
(注1) FELDA を理解するためのもっともよい手引書としては、Tunku Shamsul Bahrin; P. D. A. Perera, *Felda 21 Years of Land Development*, クアラルンプール, FELDA, 1977年がある。なお邦文としては拙稿「マレーシアの農業政策——土地開発入植政策を中心に——」(『農業構造問題研究』1977年第4号)がある。

II 調査入植地の概要

1. 位 置

トゥロラック・ウタラ入植地はマレーシアの首都クアラルンプール(Kuala Lumpur)から、国道を北に向って約120km、またペラ州の州都イポー (Ipoh) より南に約100km下ったところに位置する(第1図参照)。入植地は国道沿いに開発されており、近くにはスンカイ (Sungkai) やスリム・リバー (Slim River) といった華人街が栄えており、山奥に開発された入植地と比較してはるかに便利なところに位置している。特にスンカイの町は商業、教育、交通の便という点でトゥロラック・ウタラ入植地と密接な関係があり、大いに入植者に日常生活上の便宜を供している。トゥロラック・ウタラ入植地の奥にはさらにトゥロラック・スラタン (Trolak Selatan), トゥロラック・ティモール (Trolak Timur) の両入植地が開発されており、この三つの入植地全体が通常トゥロラック入植地と呼ばれている。

第1図 トウロラック・ウタラ入植地 (FELDA) の位置と入植地内略図



(出所) 地図はトウロラック・ウタラ入植事務所より入手。数字その他は筆者が記入したもの。

(注) (1) Aはトウロラック訓練センター(Trolak Training Centre, FELDA)。

(2) Bは土地開発研究所(Institute of Land Development, FELDA)。

2. 人 口

入植者の人種別総世帯数と人口は第5表のとおりである。合計世帯数は480、総人口数は3376人に達しており(1981年3月現在)1世帯当り平均家族員は7人余と全国平均よりかなり高くなっている。人種別にはマレー人が圧倒的に多く464世帯(96.6%)を占め、インド人(15世帯)と華人(1世帯)の占める比率はきわめて小さい。

入植地内には入植者のほかにFELDAの職員が居住し、事務所で入植地の経営と管理業務に従事している。調査時、その人数は21人であった。その業務別内訳は所長(pengurus)と副所長が各1人、栽培技術普及および監督官(penyelia——以下、単に監督

第5表 トウロラック・ウタラ入植地の人種別世帯数と人口構成(1981年3月現在)

	マレー人	華人	インド人	合計世帯数	合計人口数
第1開発地区	299	1	13	313	2,207
第2開発地区	112		2	114	798
第3開発地区	53			53	371
合 計	464	1	15	480	3,376

(出所) Jawatan-Kuasa Kemajuan Rancangan, Trolak Utara, FELDA [トウロラック・ウタラ入植地入植者開発組合(FELDA)], *Laporan Suku Tahunan, Mach 1981* [第1四半期報告書 1981年3月]。

督官) 5人, 同助手 (pembantu luar) 3人, 社会開発相談員(宗教, 婦女子および幼稚園等の組織作りと

FELDA (マレーシア) オイル・パーム入植地における栽培組織と所得配分

第6表 出身州別にみた入植者数(トゥロラック・ウタラ入植地, 1981年3月現在)

州 名	第1 開発地区	第2 開発地区	第3 開発地区	合 計
ペラ	296	111	51	458
セランゴール	3	1	—	4
ケダ	6	1	1	8
ペナ	2	1	1	4
ペリス	2	—	—	2
クランタン	3	—	—	3
マラッカ	1	—	—	1
合 計	313	114	53	480

(出所) 第5表に同じ。

第7表 入植者の入植前職業分類(トゥロラック・ウタラ入植地, 1976年)

職 業	入植者数	%
商業	14	3.6
米作	191	48.6
漁業	13	3.3
ゴム採液	79	20.1
オイル・パーム・エステート労働者	17	4.3
退役軍人	15	3.8
日雇労働および雑業従事者	56	14.2
失業者	8	2.0
合 計	393	100.0

(出所) FELDA Settlers Census: Survey on Household and Socio-Economic Condition of FELDA Settlers (October-November 1976), Institute Pembangunan Tanah & Jabatan Memproses Data, FELDA, 1978年, 282ページの第5・1・6表より作成。

活動に対する助言, 補導係) 2人, 事務員 3人, 運転関係職員 6人となっている。このほか入植地内には FELDA 協同購買組合職員, 小学校教師, 入植地保安警備員, 助産婦および警官等がそれぞれ若干名勤務しているが, これら職員は直接 FELDA によって雇用されている職員でなく, それぞれの関係機関から派遣されて勤務している。

3. 出身地と職歴

つぎに入植者の州別出身地をみると第6表のごとくである。容易に予想されごとく, トゥロラ

第8表 ペラ州出身マレー人入植者の出身郡別構成(トゥロラック・ウタラ入植地, 1976年)

郡 名	入植者数	%
バタン・パダン(Batang Padang)	43	11.7
ディンディン(Dinding)	31	8.4
ヒリール・ペラ(Hilir Perak)	93	25.2
キンタ(Kinta)	16	4.3
クリアン(Krian)	122	33.1
クアラ・カンサール(Kuala Kangsar)	37	10.0
ラルット&マタン(Larut & Matang)	14	3.8
スラマ(Selama)	4	1.1
ウル・ペラ(Ulu Perak)	9	2.4
記 載 も れ と も 合 計	369	100.0

(出所) 第7表に同じ。

ック・ウタラ入植地はペラ州に位置しているため, マレー人入植者 464 世帯のうちペラ州出身者が 458 世帯と 98% 以上を占めている。マレーシアでは土地は行政的に州政府の管轄下に属するため, 州有地の所有権の譲渡や耕作権に関しても, 当然州政府の主張, 意向が大きく配慮される。したがって FELDA は中央政府管轄下の入植開発機関ではあるが, 入植者の選定に対し当該入植地の位置する州の出身者を優先することが要請されるのである。第6表にみるようにトゥロラック・ウタラ入植者のうちペラ州出身者が圧倒的に多いのはそのためである。

つぎに入植者が入植する前の職業がどのようなものであったかを見てみよう。入植者の職歴に関する統計はトゥロラック・ウタラ入植地事務所では得られなかったが, 1976年に行なわれた調査(FELDA Settlers Census)の数字を整理すると第7表のごとくになる。

もっとも比率の高い職業は米作農民の 48.6% で, ついでゴム採液従事者の 20.1% となっている。このように米作農民の比率が高いのは米作地

域における過剰人口と貧困農民層の多量の滞溜を反映したものであるが、この事実は調査入植地のペラ州出身マレー人入植者の出身郡 (district) 別構成にも如実に反映している (第8表)。つまり、クリアン (Krian) 郡米作地帯の出身者が33.1%と圧倒的に高いのである。ではこうした米作農民は階層的にどのような農民であったであろうか。筆者がインタビューした76戸の入植者のデータから若干補足的に分析しておこう。76人の入植者のうち米作農民出身者は36人と47.3%を占めているが、そのうち32人が小作人であり、自作人と自・小作人は2人ずつにすぎない。FELDA は原則として2エーカー以上の土地所有者は入植を許可しないことにしているが、トゥロラック・ウタラ入植地ではインタビューした76戸のうち4エーカーの自作農出身の入植者が1戸あった。しかしこれはあくまで例外であって、ほとんどの入植者は小作人であり、その経営規模も1～3エーカーと小さく、米作以外に季節的雇用労働の機会を利用するか、または農村の雑業機会に従事するかして付加的に現金収入を得ていた農民がほとんどである。そしてこれらインタビューした36人の米作農民のほとんどがクリアン (Krian) 米作地域からの出身であることもまた確認された。筆者は1968～69年にクリアン地域のある米作村を実態調査したことがあるが、同村および周辺村からの流出者がトゥロラック・ウタラ入植地に入植者として定着している例にいくつか会った。

4. 歴 史

トゥロラック・ウタラは入植地としてこれまでどのように開発、運営されてきたのであろうか。いまその開発史に簡単に触れておこう。第9表はいくつかの主要開発事業が開始された年次を示したものである。表からもわかるようにトゥロラッ

第9表 主要入植事業の開始、完了年月

事業項目	第1開発地区		第2開発地区		第3開発地区	
	年	月	年	月	年	月
開発事業の開始 (密林伐採)	1968	11	1969	11	1970	10
整地・植付準備作業の完了	1970	12	1970	8	1971	8
オイル・パームの植付完了	1971	3	1971	1		
入植開始	1972	11	1973	5	1975	7
収穫作業開始	1973	9	1974	3	1974	10
ブロック・システムの開始	1976	9	1977	1	1977	11

(出所) 第5表に同じ。

ク・ウタラ入植地は1968年11月に密林伐採によって入植開発事業が開始されてから、最終段階の入植者の移住が開始されるまで実に7年近い年月が掛っている。この間、膨大な開発作業(たとえば伐採、草刈り、木材搬出、野焼き、農道建設、整地作業、苗木植付、初期栽培管理作業等々)はほとんど請負業者によって行なわれる。初期入植者の労働力はこれら諸事業において雇用労働として最大限利用されるよう配慮されるが、彼らの大部分は住宅が建設され、収穫が可能になる少し前の段階で入植するシステムになっている。

トゥロラック・ウタラ入植地でブロック・システムが採用されたのは、収穫作業が開始されてから3年経った1976年から77年にかけてである(注1)。FELDA でブロック・システムを採用する前は集団栽培方式 (collective working system) と個人栽培方式 (individual working system) の二通りの栽培労働力利用方式が採用されていた(注2)。前者では入植者に個別の作業区 (working lot) をあたえず集団的な相互扶助的栽培労働方式が採用され、所得も一定の賃金率をベースに平等に分配されていた。しかし、この方式では入植者個々人の収入がその労働生産性を必ずしも反映しないため、一部

の入植者の不満を増長させ、ひいては労働意欲を低下させることになり労働力の利用組織の変更を余儀なくされたのである。そして採用されたのが個人栽培方式である。この方式は前者とは全くこととなり、入植者はあたえられた作業区だけを栽培管理すればよく、収入も労働生産性に応じて入ってくるようになった。しかし、この新しい方式は結果として入植者間の勤労意欲の差異から所得格差を生ぜしめただけでなく、全般的な粗放栽培をもたらした適期作業の混乱と作業能率の低下が各地で指摘されるようになった。ブロック・システムが採用されるようになった背後にはこうした事情があったのである。

5. 経済活動と資産状況

入植者は1人当り10エーカー(550本)のオイル・パームと0.25エーカーの屋敷地(tanah kampung)があたえられ、オイル・パームからの収入が月々の主たる所得を形成している。しかし、入植者の経済活動は決してオイル・パームに限定されているわけではなく、そのほかにも副収入を得るため種々の仕事に従事している。

第10表からわかるようにトゥロラック・ウタラ入植地では兼業として小売店(12戸)と養池漁業(16戸)に従事している入植者がもっとも多いのがわかる。その理由は労働拘束時間は長いが労働が相対的に軽く、収入もよいからである。養池漁業とインド牛飼育は政府の補助金によって始められたものである。そのほか、オイル・パームの果実を運搬するためのローリーを共同購入している入植者も多い。ブロック単位で共同購入している例と、ブロックをまたがって共同購入している場合とがあり、全部で10台が207人の共同所有となっている。こうしたローリーは協同組合を通じてローリーを所有しない他のブロックに賃貸し、その

第10表 入植者の兼業(トゥロラック・ウタラ入植地, 1981年3月現在)

兼業の種類	従事世帯数 (戸)	面積 (エーカー)	頭数
インド牛飼育	2	—	4
養池漁業	16(8カ所)	5	—
バナナ	2	3	—
キャッサバ	3	3	—
ヤシ栽培	JKKR ¹⁾	5	—
ココア栽培	JKKR	5	—
小売店(雑貨店)	12	—	—
レストラン	2	—	—
行商人	2	—	—
自動車修理	2	—	—
家具製造・修理	1	—	—
合 計	41 ²⁾	21	4

(出所) 第5表に同じ。

- (注) 1) JKKR(入植者開発組合)が栽培しているもの。
2) ここに記載されている41戸のほかにも、兼業に従事している農家は多数にのぼる。彼らは主として近在の入植地、エステートで日雇労働者として働いているが、入植地事務所はその数字を把握していない。

賃貸料が配分されるのである。

これらの兼業は入植地で行なわれる例が多いが、入植者は入植地の外で所得を得ている場合もある。たとえば第10表でみられる行商人のケースがそれであるが、こうした外での兼業は入植地事務所の許可制となっている。しかし、外での兼業の実態は正確に把握されていないことが多く、実にさまざまな兼業が入植地の外で行なわれている。たとえば、近隣のエステートに日雇い労働者として通っている婦女子、トゥロラック・ティモール入植地の開発労働に同じく日雇い労働者として従事している世帯主等である。また、入植前に所有していた零細な米作地を小作に出し小作料を得ているもの、入植後に土地を入植地外に購入しそれを小作に出している例も若干ではあるが見ることができる。

これら入植地内外の兼業収入はオイル・パームからの収入と合わせて、入植者の家計を支えている。

るのであるが、ここで彼らの生活水準がどの程度のものであるかを耐久消費財の所有状況から判断してみよう。トゥロラック・ウタラ入植地の入植者開発組合が発行した *Laporan Suku Tahunan Pertama, Mach 1981* (1981年第1四半期の報告書)によると、480入植世帯のうち自動車を所有している世帯数43戸(9%)、モーター・サイクル467戸(97%)、テレビ464戸(96%)、ラジオ477戸(99%)となっており、普通の米作農民よりはるかに高い生活水準を享受しているといえる。また、入植したとき FELDA が用意した家屋を改築、新築する入植者が多いが、1000^{ドル}(調査時では1マレーシア^{ドル}は約100円に相当)以上の改築を行なったものが257世帯と全般の53.5%にも達しているのである。なかには5000～1万^{ドル}以上の資金を家の新築に投じている入植者もあり、ここにも入植者の生活水準の昇が反映しているといえる。では、こうした生活水準の背景となっているブロック・システムとはいかなる実態をもったものであろうか。

(注1) 通常、オイル・パーム樹は収穫作業開始後3年間は生産性が低く、入植者は FELDA からの補助をまだ必要とする。ブロック・システムが実施されるのは生産性が高まり、諸経費差し引き後の収入が入植者の生活を保証できるようになる4年目からが一般的である。したがってオイル・パーム入植地でブロック・システムが実施されるのは、入植地開発が開始されてから最低8年から9年後ということになる。

(注2) Tunku Shamsul Bahrin; P. D. A. Perera, 前掲書, 39～41ページ。

III ブロック・システムの基本枠組

ブロック・システムが最初に FELDA のオイル・パーム入植地に導入されたのは1975年、スハルト(Suharta)入植地(ペラ州)においてであるとされるが、1982年11月現在では FELDA 全体で

88カ所の入植地で実施されるに至っている(注1)。

トゥロラック・ウタラ入植地では前述のように1976年から77年にかけて各開発地区ごとに採用されている。またブロック・システムはそれまで FELDA によって採用されていた集団型栽培方式と個人型栽培方式の欠点を是正するために導入されたものである。以下、トゥロラック・ウタラ入植地の事例に即してブロック・システムの諸特徴と問題点を整理することにする。

1. 栽培作業の組織化

ブロック・システムの基本的枠組はまずつぎの二つの柱に分けることができる。一つはブロック分け、すなわち入植者をグループ分けすることによる栽培作業の組織化であり、もう一つは新しい賃金制度の導入である。まず第1の栽培作業の組織化から述べることにする。

トゥロラック・ウタラ入植地はすでに触れたように、480世帯の入植者が居住していたが、これら入植者は栽培作業のための最小単位組織として27のブロックに分割編成されている。いまブロックの世帯数と栽培面積をみると第1図に記したごとくである。各ブロックは20世帯で200エーカーの栽培地を基準として形成されているが、この規模はより組織的で協業的な栽培作業と効率的な収穫物の運搬および迅速な加工処理を基準として決められたものであるといわれる。しかし、これはあくまでも大体の基準であって実際には主として地形、地勢条件によってブロックごとの入植世帯数には多少の出入りが見られる。たとえば、第2開発地区・第7ブロック、第3開発地区・第3ブロックでは参加入植世帯数がそれぞれ6戸、8戸と極端に少なくなっているが、これは明らかに沼沢地、小河川といった地形条件のため、まとまった広い栽培面積を1カ所に造成できず、したがっ

て入植世帯数も少くならざるを得なくなっているのである。

このようにブロックごとの作業区域は1カ所にまとめられているが、ブロック構成員の家屋も入植者住居区(perkampungan)においてできるだけ隣接するように工夫されている。種々の事情から必ずしもすべてのブロック構成員が1カ所にまとまって居住できない例もあるが、おおむね彼らは近接して生活しているといえる。これはもちろん、ブロック構成員相互の連絡、情報交換をつねに密接に保ち、ブロック単位の栽培作業組織の緊密化と効率化を狙ったものであるが、それと同時に彼らの日常生活での連帯感を強め、ブロックへの帰属意識を育成する目的もあったと考えられる。ブロック構成員は1人当たり10エーカーの栽培面積を作業区としてあたえられているが、実際は面積単位でなく1エーカー当りの平均オイル・パーム植付本数55本を基礎として計算し、550本のオイル・パームが各構成員にあたえられているのである。したがって各ブロックごとの栽培面積は正確に測量されているが、各ブロック構成員の作業区的面積は個別には測量されていない。しかし、各入植者が自分の作業区の境界をきちんと識別できるように工夫されていることは言うまでもない^(註2)。

このように栽培作業の組織化はまずブロック単位による作業人数と作業面積の標準化となって現われているが、これは前にも述べたように能率的な栽培管理と迅速な収穫物処理を実現するための作業グループの適正規模化と考えることができる。

しかし、栽培作業の組織化はもう一つの側面が加わらないと十分でない。それは個別栽培作業の日程化である。言うまでもなく、オイル・パーム入植地の栽培管理はいくつもの種々雑多な個別作

業から成り立っているが、それらの作業を全体的に効率的に管理するにはいくつかの作業に分類し、きめられた日程にしたがって各ブロックが作業することが栽培作業の組織化に必須の条件になってくるわけである。ために各入植地では各ブロックにガイド・ラインとして年間作業日程表を作成して渡し、それにしたがうべく事務所に勤務する監督官(penyelia)を通じて助言、指導しているのである。トゥロラック・ウタラ入植地の場合、栽培管理作業の日程表は第11表に見られるように細かく八つに分類されている。FELDAの各オイル・パーム入植地ではこうした8種類の栽培作業の年間日程表を作成し、各ブロックの作業ガイド・ラインとして指導するのであるが、重要なことはこれはあくまでガイド・ラインであって強制ではないことである。各ブロックまたは各入植者は個々の都合、事情によりある程度自主的に作業することが許されている。入植者の作業を観察しているとすべての入植者が日程表に厳密にしたがって作業しているわけではない。同じブロック内でもあるものは除草作業に従事し、あるものは枝葉剪定作業に従事しているといった具合である。しかし、協同作業体であるブロックの一員としてまた賃金をうけとる都合上毎月の日程表から大きくはずれて作業することができないことも事実である。特に収穫作業と施肥作業はローリーまたはトラクターを共同使用する関係から、入植者は一定の日程にしたがい同時的に作業することが要請される。この二つについては個別的に作業を行ないにくいと、入植者は日程を規定どおり守らざるを得ない。

ところで、各入植者の作業区は10エーカーごとに分割されていると述べたが、ブロック・システムが導入された際FELDAは各入植者の作業区を

第11表 ブロック・システムにおける栽培労働日程表の事例
(トゥロラック・ウタラ入植地, 1981年11月現在)

仕 事 の 種 類	回 数	作 業 時 期 (月)											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 房果の収穫・集荷, 落下房果実の収集, 枝葉剪定	毎月3回	-----											
2. 農道, 暗渠の清掃と除草	1年3回	-					-						-
3. 樹囲, 樹間小路の整地作業, プラットホーム整地	1年2回									-			
4. 雑木・小樹の整理, 取りはらい	1年1回						- - -						
5. 病虫害駆除薬散布	指示されたとき												
6. 枝 葉 剪 定	1年1回									- - -			
7. 施 肥 作 業	指示されたとき												
8. 雑草 (lalang) 駆除	指示されたとき												

(出所) トゥロラック・ウタラ入植地, FELDA 事務所資料より作成。

第12表 トゥロラック・ウタラ入植地における
小作業区制実施ブロック (1981年11月
現在)

	開発 地区	ブ ロック	世帯数	栽培面積 (エーカー)	小作業区数
1		1/1	24	242.5	2
2		1/2	19	194.7	4
3		1/4	17	177.8	2
4		1/5	21	217.0	3
5		1/7	21	215.0	2
6		1/9	20	201.6	2
7		1/12	20	200.2	4
8		1/14	12	125.8	2
9		1/15	18	180.0	4
10		1/16	22	227.6	4
11		1/17	9	115.4	3
12		3/3	8	88.8	3

(出所) トゥロラック・ウタラ入植地の実態調査時
に入植事務所職員より確かめ表にしたもの。

2～4カ所の小作業区 (sub-working lot) に分割するように指導している。これは同じブロック内でも地形条件や肥沃度の差が作業難易の差および収穫の差につながり, 入植者間に不満を惹起せしめるため, これら条件差をできるだけ僅少にすることが目的であったといわれる。しかし, 小作業区制導入のより根本的な目的は収穫物の集荷・運搬をより容易にし, 入植者相互で栽培作業を監視し, もって作業効率を高めることにあったともいわれる。トゥロラック・ウタラ入植地ではこの小

作業区制は第12表のごとく採用されている。

トゥロラック・ウタラ入植地27ブロックのうち12ブロックが小作業区制を採っているが, いくつかの小作業区に分割するかは主として地形条件により, ブロックで異なっている。トゥロラック・ウタラ入植地では4小作業区に分割しているのは4ブロック, 3小作業区は3ブロック, 2小作業区は5ブロックとなっている。言うまでもないが, 4小作業区制の場合は個々の入植者の作業区が2.5エーカーずつ4カ所に分かれていることを意味し, 2小作業区制の場合は5エーカーずつ, 2カ所に分割されていることになる。

トゥロラック・ウタラ入植地では15ブロックが小作業区制を導入してないが, その主な理由は個人型栽培労働方式のとき割りあてられた10エーカーがすでに個人所有地のごとき感覚を入植者にあたえてしまい, 特に地形, 地味の点で有利な条件にある場所をあてられた入植者が小作業区制の導入に強く反対したためであるといわれる。

ブロック・システムは上述のように実施に際しまず入植者のブロック別作業グループを形成し, ついでブロック別作業区面積の測量と小作業区制を導入しさらに栽培作業の日程化等を同時に実行

しようとしたものであるといえる。しかし、こうした栽培作業組織の変更はあくまでブロック・システムの基本枠組の一つにすぎない。具体的なブロック・システムの実施、運営はこの栽培組織にもとづいて各ブロック単位で行なわれている新しい所得の分配方法との組合わせで進行しているのである。

2. 所得配分の仕組み

FELDA のオイル・パーム入植地ではブロック・システムが導入される前は、集団型栽培方式と個人型栽培方式が試みられてきたことはすでに述べた。これら二つの作業方式のもとでの収穫物の配分は、前者は平等を基礎とした配分方式であり、後者はより個人の労働生産性に応じた配分方法であった。しかし、ブロック・システムがトゥロラック・ウタラ入植地に導入されると同時に採用された新しい所得配分方法はこの両者の中間であるといえる。つまり、栽培作業に対しては労働生産性に応じた賃金支払い方式を採用し残りを一律にブロック内入植者に等しく配分する方法を取り、全体として折衷型の所得配分システムとなっている。

ところが、同じブロック・システムを採用している他の入植地では、トゥロラック・ウタラ入植地とは異なった所得配分方式がとられている場合がみられる。そこでは賃金支払い部分がまったくなく、すべての収穫物が一旦ブロック内入植者に配当 (dividend) として一律に配分され、のちに入植者間で労働生産性に応じて再配分されるのである。しかし、その具体的な再配分の仕組みに関しては FELDA は関与せず、入植者の自治、自主性にまかされており入植地によって異なるといわれるが、詳細については調査事例がなく不明である。FELDA の「入植者所得計算課」(Bahagian

第13表 ブロック・システムにおける個別栽培労働の作業別賃金事例(トゥロラック・ウタラ入植地、1981年11月現在)

(単位: マレーシア・ドル)

個別栽培労働の種類	作業単価	予想年間賃
1. 房果の収穫・集荷、落下房果実の収集、枝葉剪定	1 房当り 0.2	1,080
2. 農道、暗渠の清掃と除草	1 回当り 100	300
3. 樹囲、樹間小路の整地作業、プラットホーム整地	1 回当り 300	600
4. 雑木・小樹の整理、取りはらい	1 回当り 150	150
5. 病虫害駆除薬撒布	1 日 (8 時間) 10	400
6. 枝葉剪定	1 回当り 300	300
7. 施肥作業	1 袋施肥当り 1	120
8. 雑草 (lalang) 駆除	1 日 (8 時間) 10	120
合 計		3,070

(出所) トゥロラック・ウタラ入植地、FELDA 事務所資料より作成。

Perakaunan Peneroka) から得た情報によると 1982 年 11 月現在、88 のブロック・システム採用入植地のうち 24 (27.3%) 入植地ではトゥロラック・ウタラと同様の折衷型方式が採用され、残り 64 (72.7%) の入植地では配当一律配分方式がとられている。本論の記述はトゥロラック・ウタラ入植地の折衷方式による所得配分の仕組みに限定される。まず賃金支払い方式から述べることにする。

(1) 賃金支払いシステム

栽培作業の日程化は八つの作業について導入されたが (第 11 表を参照)、同時に新しい賃金支払い方式 (upah kerja システム) がこれら 8 種類の個別作業について採用されるようになった。いま個別作業の賃金率を表にすると第 13 表が得られる。

この新しい賃金支払い方式は具体的にはつぎの三つの種類に区別できる。第 1 は歩合制である。この方法は収穫作業と施肥作業に適用されている。たとえば、収穫作業では房果 (bunch, マレー語で tandan) 一つを採取するといくらかと定められ、採取房果数によって賃金額が計算される。1981 年

の調査時は1房果当り20 ¢ (cent)であったが、1978~79年では30 ¢ 、1980年は15 ¢ であったといわれる。このように1房果当りの賃金率がしばしば変動するのはある程度、入植者の意向を汲んで決定されるからである。たとえば、隣のトゥロラック・スラタン入植地ではブロックにより1房果当り50 ¢ から1.2 ¢ が支払われているという。房果賃金率の水準は入植者間にしばしば意見の衝突をもたらすが、これは所得配分方式において生産性を重要視するか、または一律配分に重点を置くかの視点のちがいから生ずるのである。入植者にとっては生活と直結しているだけにどちらが自分にとって有利であるかをめぐり衝突は激しくなることもある(注3)。年間賃金支払い額は総額で3070 ¢ と予想されているが、収穫作業に対する賃金はこのうち1080 ¢ と3分の1以上を占める。したがって1房果当りの賃金率が20 ¢ であるか30 ¢ であるかは入植者の年間収入額に大きな影響をもたらすことになる。

つぎは日当賃金方式である。これは1日8時間の労働時間を基準として1日いくらくと日当賃金額を定める方式である。除草剤撒布と病虫害駆除薬撒布の両作業にこの日当賃金方式が適用され、調査時では1日10 ¢ が支給されていた。この賃金率は当時、建設関係の未熟練労働者の日当賃金が15~20 ¢ といわれていたからかなり低いといえる。

もう一つの方法は作業密度を査定して支払い賃金額を決定するやり方である。この方法が実際問題としてもっとも入植者と入植地事務所との間にトラブルを引き起しやすい。現在は枝葉剪定、樹囲整地(肥効促進のためオイル・パーム樹の周りを1本1本きれいに整地する)、樹間小路整理(剪定した枝葉を樹間小路にきちんと整理し作業しやすくする)、プラットホーム(収穫した房果を1カ所にまとめて置

く場所)、暗渠清掃などにこの方式が適用されている。これら作業は収穫作業、施肥作業のように作業成果を具体的な数値で計算することが不可能である。また除草、病虫害駆除作業のように撒布薬剤購入が自己負担で行なわれている作業とも異なるのである。つまり、作業集約度が直接入植者個人の利害得失となって現われにくいのである。その結果、傾向としてこれら作業は粗放に流れやすい。この点を考慮して導入されたのが作業密度査定方式である。各ブロック担当の監督官は枝葉剪定や樹囲整地の作業を毎日巡回、観察してその作業密度を査定する。そして、十分に作業が集約的に行なわれていると判断した場合には定められた賃金率を支払う。しかし、作業の粗放性が著しいと判断した場合には、その程度により定められた賃金の半分なり3分の1が支払われるのである。言うなれば、作業密度査定方法による賃金額の決定は基本的に監督官個人の判断に依存していることになる。

では、こうした三つの賃金支払い方式のもとで入植者は具体的に年間どのくらいの賃金が支払われているのであろうか。トゥロラック・ウタラ入植地の事例を整理してみると第14表が得られた。

この表から言える重要なことはつぎのことである。つまり入植者間の年間賃金受取り額にかなりの差があることである。たとえば、もっとも差のある入植者JとFの場合を比較すると1980年の前者の総賃金額は2730.05 ¢ なのに対し、後者のそれは1776.80 ¢ にすぎない。その差は実に953.25 ¢ に達し、月額差は約80 ¢ である。毎月80 ¢ の賃金差は入植者にとり大きいといわねばならない。ではどうしてこのような大きな賃金差が生ずるのか。その原因を表から探ると作業密度査定を要する賃金支払い部分の差であることがわかる。入植

第14表 入植者別、月別、作業種類別賃金支払い事例（1980年、第2開発地区第1ブロック、トゥロラック・ウタラ入植地、FELDA）

（単位：マレーシア・ドル）

入 植 者		A	B	C	D	E	F	G	H	J	K	合 計	月間合計
作業の種類													
1.	樹囲、樹間小路の整地作業 収	180.00	200.00	200.00	60.00	160.00	160.00	200.00	160.00	200.00	200.00	1,720.00	2,202.85
		59.55	53.85	52.50	41.10	42.75	44.40	51.15	43.50	50.55	43.50	482.85	
2.	農道整地・除草 暗渠清掃 収		15.00	15.00	15.00	15.00		15.00	15.00	15.00	15.00	120.00	844.65
		20.00	20.00	20.00	15.00	20.00	20.00	20.00	20.00	20.00	20.00	195.00	
		64.95	59.55	52.65	42.00	49.65	51.30	44.40	65.40	64.80	34.95	529.65	
3.	雑小木の整理 プラットホーム整地 収	40.00	50.00	50.00	40.00	40.00	35.00	40.00	40.00	50.00	50.00	435.00	1,197.15
		30.00	30.00	30.00	30.00	15.00		30.00	30.00	30.00	15.00	210.00	
		68.70	63.30	65.10	42.45	36.90	44.70	50.55	62.10	76.20	42.15	552.15	
4.	樹囲、樹間小路の整地 収	150.00	150.00	150.00	150.00	150.00	150.00	150.00	150.00	150.00	150.00	1,500.00	2,246.80
		84.45	93.40	64.95	58.65	62.40	66.60	67.95	81.75	98.85	67.80	746.80	
5.	枝葉剪定 空中撒布(肥料)* 収	200.00	200.00	160.00	160.00	160.00	160.00	200.00	200.00	200.00	200.00	1,840.00	3,272.40
		50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	500.00	
		95.10	100.65	76.05	84.00	76.80	83.55	88.65	107.55	118.65	101.40	932.40	
6.	農道整地・除草 収		50.00	50.00				50.00		50.00	50.00	250.00	1,369.75
		124.50	133.65	102.60	98.10	101.40	79.05	114.00	110.85	130.95	124.65	1,119.75	
7.	樹囲整地 収	200.00	200.00	200.00	180.00	180.00	160.00	200.00	170.00	200.00	200.00	1,890.00	2,629.20
		84.75	88.95	64.80	66.15	76.05	57.60	65.10	53.10	78.15	104.55	739.20	
8.	雑小木の整理 プラットホーム整地 雑草(lalang)駆除 施肥作業 収	50.00	50.00	25.00						50.00	50.00	225.00	1,866.15
		30.00	30.00	30.00	15.00	15.00		30.00	30.00	30.00	30.00	240.00	
		50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	500.00	
		81.90	91.35	74.55	78.30	78.45	86.10	77.70	78.75	107.70	106.35	861.15	
9.	枝葉剪定 収	200.00	200.00	200.00	200.00	200.00	150.00	200.00	200.00	200.00	200.00	1,950.00	2,775.15
		80.55	92.10	74.25	75.15	73.20	68.40	82.80	78.60	96.15	103.95	825.15	
10.	農道整地、除草 雑草(lalang)駆除 収	40.00	50.00	50.00	30.00	50.00	20.00	40.00		50.00	50.00	380.00	1,200.70
			20.00	20.00						20.00	20.00	80.00	
		72.30	85.20	56.25	54.60	70.20	94.20	62.85	57.90	95.10	92.10	740.70	
11.	樹囲整地 雑草(lalang)駆除 収	100.00	200.00	200.00	150.00	100.00		150.00		200.00	200.00	1,300.00	2,031.20
				20.00						20.00		40.00	
		69.75	67.80	67.50	57.60	68.25	51.60	74.10	72.45	82.80	79.35	691.20	
12.	雑小木の整理 収	30.00	50.00	50.00	30.00	30.00	30.00	30.00	30.00	50.00	50.00	380.00	1,034.85
		68.40	63.00	63.75	50.70	70.05	64.30	63.15	66.30	75.15	70.05	654.85	
合 計		2,324.90	2,607.80	2,384.95	1,923.80	2,041.10	1,776.80	2,317.40	1,993.25	2,730.05	2,570.80	22,670.85	22,670.85

（出所） トゥロラック・ウタラ入植地、FELDA 事務所資料より作成。

（注） * 肥料の空中撒布はコスト高のため結局1980年の1年のみで廃止され、調査時では入植者自身による施肥作業が行なわれていた。

FELDA (マレーシア) オイル・パーム入植地における栽培組織と所得配分

者JとF両者の収穫作業による賃金収入差は年間で約283ドルにすぎないが、作業密度査定を受ける栽培作業の賃金差は全体で500ドル以上にも達するのである。つまり、この差は監督官の作業密度に対する判断差から生じたものである。このことが、監督官と入植者との間に一種の緊張関係を引き起こしやすいのは想像に難くない。監督官は入植者が栽培作業を全く無視したり、粗放性が著しい場合にはまず入植者に直接助言、指導を行なう。しかし、さらに程度が著しい場合には手紙で賃金カットの警告を発し、作業の継続、改善を要請するのである。こうした助言、警告は実にしばしば行なわれる。入植者のなかにはこれら警告にもかかわらず作業内容に改善が全く見られない場合がある。そうした場合には賃金の部分的カット、また場合によっては全く支払われないこともある。もちろん、監督官はこうした強硬手段を取る前にブロック長(ketua blok)に事態を連絡し、入植地事務所の所長にも報告、相談する。賃金カットまたは不払いに訴えるのは監督官としては最後の手段である。

しかし、入植者は当然、こうした賃金カットの措置に対して反発する。カットが多すぎるとクレームをつけ、監督官との関係がうまくいかなることも多々ある。監督官はこうした事態をさけるため査定基準を緩やかにして、できるだけ入植者との間に摩擦が起きないように努力し、穏便に処理するのが一般的である。その結果、こうした事なかれ主義が逆に入植者の怠慢を増長させ、入植地内には粗放な栽培管理のためさながらジャングルのごとき状態を呈している作業区も多いのである。入植者の作業密度は一般に決して高いとはいえない。普通のオイル・パーム・エステートの整地、整頓状態と比較すると著しく悪いといえ

る。FELDA当局は粗放栽培管理を払拭するために作業密度査定方式による賃金支払い制度を導入したのであるが、それが現実には入植者間の賃金受取り額に差をもたらす大きな要因となっているだけでなく、しばしば監督官と入植者との間に摩擦を引き起こすか、また逆に粗放栽培を放置、増長させている。

(2) 配当支払いシステム

入植者のもう一つの大きな収入源は配当(dividend)と呼ばれるものである。入植者によって収穫された房果はブロックごとに集荷され、入植地内にある精油所(Felmill—FELDA Mill Corporationによって経営されている。1975年6月設立)で粗性油に加工されたのち、これもFELDAの関連下部組織であるFelma(FELDA Marketing Corporation, 1974年1月設立)を通じて国内、国外の市場で販売される。そして得られた収入はまた出荷量に応じて各入植地、各ブロックごとに還元される仕組みになっている。いうなれば、収穫房果量は個人、ブロック、入植地のレベル単位で把握されており、販売収入は各単位の生産性にもとづいて還元される方式が採用されているといえる。まずupah kerjaシステムにもとづいて入植者に賃金部分が計算され、残りが配当としてブロック内の入植者に一律に配分されるのである。したがって、配当類はブロック内一律配分であるがその額はブロックごとに異なることになる。

第15表は実際に入植者に配分される賃金(upah kerja)と配当(dividend)との比率を示している。この表のなかで、もっとも重要な特徴として指摘しておかねばならないのは、トゥロラック・ウタラ入植地全体として総所得のうち80%が配当として支払われ、賃金として支払われる部分は20%にすぎないという事実である。言いかえれば、プロ

第15表 開発地区別賃金および配当支払い額 (トゥロラック・ウタラ入植地)

(単位: 1,000マレーシア・ドル)

	第1 開発地区			第2 開発地区			第3 開発地区			総 計		
	賃 金	配 当	合 計	賃 金	配 当	合 計	賃 金	配 当	合 計	賃 金	配 当	合 計
1980年 1 月	62.4 (23.8)	199.6 (76.2)	262.0	26.7 (33.4)	53.2 (66.6)	79.9	14.6 (31.2)	32.2 (68.8)	46.8	103.7 (26.7)	285.0 (73.3)	388.7
2 月	29.7 (11.2)	235.9 (88.8)	265.6	12.4 (17.6)	58.1 (82.4)	70.5	7.1 (12.7)	48.7 (87.3)	55.8	49.2 (12.6)	342.7 (81.4)	391.9
3 月	35.2 (14.4)	209.9 (85.6)	245.1	14.3 (17.6)	67.1 (82.4)	81.4	9.3 (16.2)	48.1 (83.8)	57.4	58.8 (15.3)	325.1 (84.7)	383.9
4 月	59.8 (21.9)	212.7 (78.1)	272.5	30.3 (26.3)	85.0 (73.7)	115.3	16.0 (25.6)	46.5 (74.4)	62.5	106.1 (23.6)	344.2 (76.4)	450.3
5 月	84.0 (27.8)	218.0 (72.2)	302.0	38.0 (30.2)	87.9 (69.8)	125.9	19.3 (33.8)	37.8 (66.2)	57.1	141.3 (29.1)	343.7 (70.9)	485.0
6 月	40.0 (9.4)	387.2 (90.6)	427.2	18.4 (11.0)	148.7 (89.0)	167.1	8.4 (13.7)	53.1 (86.3)	61.5	66.8 (10.2)	589.0 (89.8)	655.8
7 月	67.2 (18.0)	306.5 (82.0)	373.7	32.1 (23.9)	102.4 (76.1)	134.5	15.6 (29.1)	38.1 (70.9)	53.7	114.9 (20.4)	447.0 (79.6)	561.9
8 月	41.6 (13.8)	259.8 (86.2)	301.4	17.6 (17.7)	82.0 (82.3)	99.6	7.1 (17.2)	34.2 (82.8)	41.3	66.3 (15.0)	376.0 (85.0)	442.3
9 月	61.9 (23.6)	200.1 (76.4)	262.0	32.3 (31.9)	69.1 (68.1)	101.4	15.0 (29.4)	36.1 (70.6)	51.1	109.2 (26.3)	305.3 (73.7)	414.5
10月	36.1 (20.3)	177.8 (79.7)	213.9	14.4 (19.4)	59.7 (80.6)	74.1	6.9 (19.1)	29.2 (80.9)	36.1	57.4 (17.7)	266.7 (82.3)	324.1
11月	42.5 (17.3)	203.8 (82.7)	246.3	26.3 (31.2)	58.0 (68.8)	84.3	13.9 (39.7)	21.1 (60.3)	35.0	82.7 (22.6)	282.9 (77.4)	365.6
12月	38.5 (14.0)	236.9 (86.0)	275.4	14.9 (16.0)	78.3 (84.0)	93.2	7.7 (16.2)	39.7 (83.8)	47.4	61.1 (14.7)	354.9 (85.3)	416.0
合 計	598.9 (17.4)	2,848.2 (82.6)	3,447.1	277.7 (22.6)	949.5 (77.4)	1,227.2	140.9 (23.3)	464.8 (76.7)	605.7	1,017.5 (19.3)	4,262.5 (80.7)	5,280.0

(出所) トゥロラック・ウタラ入植地, FELDA 事務所資料より計算したもの。

(注) カッコ内は%。

ック・システム下における所得配分の原則は頭割り平等主義にもとづく色彩が非常に強く、労働生産性に応じて支払われる賃金部分は全体の5分の1にすぎないことになる。もっとも、これはトゥロラック・ウタラ入植地全体の数字であって各開発地区またはブロックごとに、月ごとにこの比率は異なっている。たとえば、第1開発地区での1980年の平均配当比率は82.69%と第2、第3開発地区の77.4%、76.7%より約5%高くなっているが、これは恐らくオイル・パーム植付け時期のちがいが房果生産性の相違にはねかえって現われ、全体の収穫量が第1開発地区で高く、相対的に賃金の占める比率が低くなったためと思われる。ま

た同じ第1開発地区でも月によって賃金と配当の比率はことなるが、これは月により栽培作業によって生ずる賃金額の大きさ、月間房果生産性および販売価格に起因することは言うまでもない。たとえば、隣接するトゥロラック・スラタン入植地では房果収穫作業の賃金率が1個につき50¢から1.20¢と高いため、所長 (pengurus) の情報によれば入植地全体の賃金と配当の比率は約50:50であるという。

このように FELDA が支払う実際の賃金と配当の比率は入植地、ブロック、月によりことなるが、トゥロラック・ウタラ入植地では全体として1:5の比率で賃金と配当が入植者に配分される頭割

第16表 オイル・パーム房果売買システムに関する統計事例（第3開発地区・第1ブロック、トゥロラック・ウタラ入植地、1980年）

（単位：マレーシア・ドル）

入植者	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合 計*		差額
													(+)	(-)	
A'	+14.26	+ 3.39	+21.26	- 4.04	+55.63	+13.08	-30.79	-16.64	-16.95	-38.27	-13.65	-28.37(5)	107.62(7)	148.71(-)	41.09
B'	+34.36	+ 7.29	+11.66	- 5.24	-23.87	+ 3.78	- 3.79	-13.94	- 6.75	- 4.37	- 0.15	+ 6.43(5)	63.52(7)	58.11(+)	5.41
C'	+13.96	+31.29	+57.86	+54.76	+20.53	+ 9.18	- 1.99	-14.54	+12.45	- 1.97	+ 0.15	+16.63(9)	216.80(3)	18.50(+)	198.30
D'	- 3.44	- 1.41	- 4.24	-21.14	-32.27	-37.02	+34.31	+20.26	-36.45	+ 4.03	-31.05	-38.87(3)	58.60(9)	205.80(-)	147.29
E'	-21.44	+30.39	+14.66	-16.94	-15.47	+46.38	+ 4.61	+22.06	- 0.75	+47.23	+16.65	+18.13(8)	200.11(4)	54.60(+)	145.51
F'	+ 1.06	+27.69	+ 5.36	+ 6.76	+ 7.33	+21.78	-17.29	+ 5.86	+ 8.55	+28.63	+25.05	+13.93(1)	152.00(1)	17.29(+)	134.71
G'	+ 6.46	-11.01	- 8.44	-26.54	-20.87	-49.92	+ 7.91	-49.04	-14.55	-47.57	-62.55	-32.57(2)	14.37(10)	323.06(-)	308.69
H'	+12.46	+ 8.79	+ 4.46	+22.06	+24.13	- 9.42	-10.69	+ 1.36	-32.55	+29.53	-10.65	- 2.57(7)	102.79(5)	65.88(+)	36.91
J'	-21.14	-23.61	-32.74	-18.44	-15.77	-38.52	-38.29	- 8.84	-18.45	-47.57	-36.30	-29.87(0)	—	12309.54(-)	309.54
K'	+ 0.16	+ 4.29	-13.24	-37.64	-19.07	+ 6.78	-32.89	+17.26	+19.95	+ 2.53	+34.95	+ 7.03(8)	92.95(4)	102.84(-)	9.89
L'	-14.24	-16.41	-21.64	-10.04	- 6.77	- 2.52	+46.01	+ 0.46	+25.65	+ 2.53	+26.55	+38.23(6)	139.43(6)	71.62(+)	67.81
M'	-16.04	- 7.11	+19.16	+29.56	+44.23	+13.38	-10.09	+11.86	- 4.65	-25.63	+22.65	+ 2.23(8)	168.70(4)	37.89(+)	130.81
N'	- 9.74	-12.81	-41.74	-34.94	-53.57	-22.02	-31.39	-15.14	-17.85	-25.67	- 8.85	-24.77(0)	—	12318.49(-)	318.49
O'	+ 7.36	-57.51	-25.84	-20.54	-28.37	+11.28	-56.89	+35.26	+43.65	- 9.47	+10.35	+ 8.23(6)	116.13(6)	198.62(-)	82.49
P'	+13.36	-10.41	-14.44	-15.44	+ 9.73	- 3.42	-10.09	+ 9.46	+43.85	-10.37	+25.95	+13.33(6)	116.67(6)	64.17(+)	52.60
Q'	-18.44	+ 5.49	-18.04	+16.66	+15.13	-11.82	+10.61	-13.34	+ 0.75	+13.93	- 0.15	- 7.37(6)	62.57(6)	69.16(-)	6.59
R'	- 1.94	+11.79	-13.54	+13.66	+10.33	+ 3.18	+28.01	-40.94	-28.65	+31.03	+14.25	+24.43(8)	136.68(4)	85.07(+)	51.61
S'	-15.44	+18.09	+36.86	+21.16	+14.23	+17.22	+55.61	- 8.54	-41.25	- 4.97	- 3.15	-18.17(5)	145.95(7)	108.74(+)	37.21
T'	- 7.34	-17.31	-19.24	+ 5.56	-18.77	- 9.12	+22.91	+ 7.06	- 3.75	+12.13	-25.65	+ 6.73(5)	54.39(7)	101.18(-)	46.79
U'	+20.56	+18.09	+51.26	+49.06	+60.73	+79.38	+47.51	+27.16	+50.55	+10.63	+33.15	+24.43(12)	472.51(0)	—	472.51
V'	+ 5.26	- 8.91	- 9.34	- 8.24	-27.17	- 7.02	-13.09	+22.96	+16.35	-17.57	-17.55	+ 2.83(4)	47.40(8)	108.89(-)	61.48
ブロックの月間総 房果収穫個数	7,864	8,478	10,545	12,526	13,620	15,948	12,803	12,883	11,540	12,108	11,183	10,323	39,821	(月平均 11,659.75)	
1入植者当り平均 月間房果収穫個 数	374.47	403.71	502.14	596.47	648.57	759.43	609.66	613.47	549.52	576.57	532.52	491.57	6,658.08	(月平均 554.85)	
1房果当り価格	0.30	0.30	0.30	0.30	0.30	0.30	0.30	0.30	0.30	0.30	0.30	0.30	—	—	—
1入植者当り平均 収穫額	112.34	121.11	150.64	178.94	194.57	227.82	182.89	184.04	164.85	172.97	159.75	147.47	1,997.46	(月平均 166.45)	
移動金額	(+129.26)	(+166.59)	(+222.54)	(+219.24)	(+262.00)	(+208.20)	(+257.49)	(+181.02)	(+222.75)	(+207.83)	(+209.70)	(+182.59)	(12)	(128)	
誤差	(-129.20)	(-166.50)	(-222.48)	(-219.18)	(-261.97)	(-208.02)	(-257.28)	(-180.96)	(-222.60)	(-207.80)	(-209.70)	(-182.56)	2,469.21	2,468.25	0.96
	±0.06	±0.09	±0.06	±0.06	±0.03	±0.18	±0.21	±0.06	±0.15	±0.03	±0.00	±0.03	—	—	—

（出所） 第3開発地区・第1ブロック、トゥロラック・ウタラ入植地の資料より作成。

（注） * カッコ内は月数。

り平等主義的な所得配分方式といえる。その意味では入植者にとっては各入植者間に階層分化を大きく生ぜしめる可能性の比較的小さい所得配分方式といえる。ためにこうした一律頭割り傾向の強い所得配分方式に不満を訴える入植者がいることも確かである。勤勉に栽培作業に従事する入植者でも、その80%は平等に配分され、残り20%が賃金として自からに還元されるにすぎないからである。FELDA 当局はこうした不満を解消するためにブロック・レベルでの所得再配分という制度的工夫を導入しており、ある程度不満鎮静化に成功しているといわれる。その制度的工夫とは房果売買システム (jual-beli tandan sistem) と呼ばれるもので、ブロック・システムと同時にトゥロラック・ウタラ入植地にも導入されている。この房果売買システムとは、一言にしていえば、配当として配分された所得部分を入植者個々人の収穫房果数の多少に応じて、ブロック内で調整再配分する仕組みであるが、いまその内容を少し詳しく説明してみよう。

まず月ごとにブロックの総房果収穫個数を算出し、それをブロック構成員で除して1人当たり平均房果収穫個数を計算し、さらに、それに1個当たり30¢の価格を乗じて (トゥロラック・ウタラ入植地ではどのブロックも30¢であった)、その月のブロック構成員1人当たりの平均房果生産額をきめる。そして同時に同様な方法で入植者個々人のその月の房果生産額を算出し、その額が平均値より多い入植者はその差額を受け取り、少ない場合はブロックにその差額を支払うのである。

第16表は第3開発地区・第1ブロックに所属する入植者21人について1980年の房果売買システムによる収入の出入りを月ごとに整理したものである。この表からいくつかの興味ある傾向を指摘す

ることができる。第1は1人当たりの平均月間再配分類は比較的小さく、プラス額で19.91ドル (2469.21ドル÷124カ月)、 マイナス額で19.28ドル (2468.25ドル÷128カ月) にすぎないことである。つまり、この房果売買システムで月々再配分される額はプラス、マイナス平均1人当たり20ドルを若干下回る程度でしかない。第2は個々の入植者の例をみると、毎月再配分を得る入植者と逆に毎月支払う入植者があり、その両者の収入差はかなり大きいことである。たとえば、入植者 U' は年間472.51ドル (月平均39.37ドル) を再配分によって得ているのに反し、入植者 N' は年間に318.49ドルを支払っており、その差は実に年間800ドル近くに達する。これは月額にして約67ドルであり、入植者にとって決して小さな額ではない。

こうした大きな房果生産性の差がなぜ生ずるのかは必ずしも明らかにされてないが、恐らく収穫作業密度のほかに地味、地形条件さらに施肥等々の複数の要因がからんでいると推測される。200エーカー前後の比較的小さいブロック内でもこれだけの生産性格差が生ずることは注目に値するといえよう。

房果売買システムは入植者の房果生産性にもとづいて配当を再配分するための工夫である。その効果は決して大きいとはいえないが、入植者の間に伏在する所得配分に関する不平等感を鎮静する心理的效果は無視できないばかりでなく、個別例としては再配分の効果が著しい場合もあるといえる。

3. 罰金制度——目的と効果

入植者の所得のうち配当部分が5分の4と肥大化していることは、入植者の所得が自分自身の労働だけでなく、他の入植者の労働生産性に大きく依存していることを意味している。ある入植者が

忘れ収穫房果数が少なければ少ないだけ、個々の入植者の配当も減少するから入植者は当然、相互に他入植者の作業状況に関心を持たざるを得ない。ブロック・システムは栽培作業の組織化と同時に協同化を導入したといっても、ブロック内では栽培規則や日程を守らず他入植者に迷惑、不利をもたらすものも多く、入植者間に不平不満、摩擦が絶えなかったという。FELDA はこうした傾向を解消するためにブロック単位に罰金規定 (undang-undang blok) の設置に踏み切ったのである。トゥロラック・ウタラ入植地ではこのブロック罰金規定は1980年1月に導入されている。

罰金規定の具体的内容はブロックごとに異なるが、大体の骨組みはFELDAの指導により大きな差はない。

つまり罰金規定の主な対象は収穫作業と施肥作業の怠慢であり、どのブロックも収穫作業の怠慢にもっとも重い罰金額を科しているといえる。ともあれ、この罰金規定の意味と役割を吟味する前に罰金規定の具体例を示すことにしよう。以下は第1開発地区・第12ブロックの事例である。

第1開発地区・第12ブロック罰金規定細則

1. 収穫作業に関する罰金規定

a) すべてのブロック員は収穫物運搬ローリーが作業区に入る前に収穫作業を終了しておかねばならない。もし、ローリーが入った時に収穫作業がまだ終了してない場合には、1房果当り30^ルの罰金を科す。

b) オイル・パームの樹に収穫作業後、成熟房果が未収穫のまま3房果以上残置された場合には、1房果につき50^ルの罰金を科す。ただし、巡回監視人 (pemereksa) がその房果を収穫した場合には1房果につき1^ルの罰金を科す。

c) 収穫された房果がローリー搬人にもかかわらず、作業区内に落下したまま放置され農道端のプラットホーム (房果置場) まで運搬されてない場合には、1房果につき2.50^ルの罰金を科す。

2. 施肥に関する罰金規定

a) ブロック員が肥料運搬車の作業区到着に間に合わず、肥料を受取ることができなかったり、また、受持ち作業区の施肥作業を行えなかった場合には、肥料運搬車1台につき4^ルの罰金を支払う。

b) 受持ち作業区での施肥作業は定められた日より3日以上遅れることはできない。万一、ブロック内の他入植者によって施肥された場合には、1袋につき3^ルの罰金を支払う。

c) 肥料が平均して撒布されず、受持ち作業区内に5本以上の樹が施肥されないまま残置された場合には、1本の樹につき50^ルの罰金を科す。

第12ブロックはFELDAが当初考えていたより厳しい罰金規定を作ったといわれるが、他ブロックと大差があるわけではない。しかし、他ブロックにはFELDAがすすめるまま単に形式的に罰金規定を作り、実施しないブロックもあるといわれる。ところが第12ブロックの罰金徴収額をみると1980年から81年にかけて毎月ほとんど250^ルに達しており、厳しく適用されているのがわかる。罰金規定の運用は各ブロックによって大きな差があるといえよう。各ブロックにはブロックの総合的な組織運営を司るブロック委員会 (Jawatan-Kuasa Blok) が設置されているが、罰金規定の実施に関しては別個の下部関係委員会を作り、巡回監視の仕事を一任させているブロックもある。また特に委員会を設置せず入植者が2～3人グループとなり相互に作業監視のため、きめられた日に巡回するやり方を採用しているブロックもある。また、場合によってはFELDAの監督官が入植者と同行巡回し、問題がある場合に罰金を科すこともある。第12ブロック (20人) は巡回監視人 (pemereksa) 5人を1グループとし、月3回の収穫作業が終わるたびに各入植者の小作業区 (第12ブロックでは四つの小作業区制をとっている) に入り収穫作業を検査する方式を採用している。この場合、入植地事務所の監督官が同行することもある。

第17表 栽培作業怠慢による罰金事例 (トゥロラック・ウタラ入植地)

(単位: マレーシア・ドル)

入植者	第3開発地区・第1ブロック(1980年)			入植者	第1開発地区・第5ブロック(1981年)		
	収穫・施肥 作業(3月)	収穫作業 (4月)	集荷作業 (4月)		収穫作業 (3月)	収穫作業 (4月)	収穫作業 (6月)
A'	7.40	43.60		A''	1.50		
B'	5.20	5.00		B''	7.50		3.00
C'	1.80	59.00		C''	1.50	9.00	
D'	4.60	19.10		D''	3.00	4.50	3.00
E'	0.70	0.90		E''	1.50	3.00	
F'		1.40		F''	1.50	1.50	
G'	15.10	29.00	27.00	G''	3.00	1.50	
H'	1.30	7.00		H''		17.50	
J'		6.20		J''			
K'				K''	3.00	3.00	1.50
L'				L''	6.00		9.00
M'				M''	16.00	10.50	10.00
N'	15.20	20.60		N''	10.50	20.50	
O'		1.70		O''	21.00	17.50	19.50
P'	7.00	0.70		P''	20.50	100.00	6.50
Q'	5.20	0.70	26.00	Q''	64.00	92.50	31.00
R'	0.70	1.40	26.00	R''	14.00	26.50	13.00
S'		0.60		S''		34.00	4.50
T'	30.70	9.70		T''		26.50	
U'	3.80	3.80		U''	27.00	113.00	15.00
V'	1.40	6.80		V''			
合計	94.00	157.80	79.00	合計	201.50	486.00	116.00

(出所) 第3開発地区・第1ブロックおよび第1開発地区・第5ブロック、トゥロラック・ウタラ入植地内の資料より作成。

このように罰金規定を運営実施するための組織はブロックにより若干相違がみられるが、一般的に自治組織としての機能をあたえられているといえる。しかし、監督官が同行したり、罰金額の徴収、運用等について入植地事務所職員のチェックとコントロールを受けなければならず、必ずしも十分に自治的な運営組織体として機能しているとはいえない。もっとも、ある意味ではFELDAは入植者の活動をあらゆる点でチェック、コントロールしているとも言えるのであって、罰金規定の運営実施も決して例外ではない。

ではこうした罰金規定が実施されるなかで、どのくらいの罰金額がブロック段階で徴収されているのか、その例を二つのブロックで見ることにする。第17表がそれである。第17表で例示した二つのブ

ロックのほかにいくつかのブロックの罰金徴収例をみると、その第1の特徴は罰金徴収がかならずしも毎月行なわれていないことである。これは罰金徴収が罰金規定の存在と機能を入植者に想起せしめるためにしばしば見せしめ的に行なわれる傾向が強いことを示している。第2は前にも記したごとく、収穫作業の怠慢に対して科せられる罰金例が圧倒的に多いことで、上記表にもこうした傾向が明瞭に現われている。ところで徴収された罰金はいかに運用されるのであろうか。原則として徴収された罰金は怠慢入植者の栽培作業を完遂するために雇用される労働者の賃金として支払われる。しかし、ここに一つの問題が存在する。それは被罰金科料者の支払う房果単位当り罰金額が一般に収穫作業労賃より若干高い程度にすぎないこ

とである。たとえば、第12ブロックの罰金額は1房果当り50¢であるが、収穫作業に雇用される労働者は1房果当り30¢の労賃が支払われるのが普通である。問題は罰金額と雇用労賃額との差が大きくなければ、罰金としての機能を十分に果たすことができないことである。たとえば、入植地内でコーヒー店や雑貨店を営む入植者また入植地外に仕事をもつ入植者は罰金を支払って収穫作業を肩代わりしてもらう方が楽なのである。そのうえ、彼らにとっては罰金を支払っても収穫された房果は販売されたのち配当の一部として還元されるから、あまり実質的な損失を蒙むらずに済むという意識がある。

その結果、罰金科料の効果はせいぜい違反者をして強制的に収穀労働者を雇用させるという限定的なものになり、入植者自身を収穫作業に従事せしめるといふ本来の目的を達し得ない状況にあるといえる。入植者のなかには罰金額を引きあげ、同時に収穫作業の賃金水準をも引き上げるべきであると主張するものもいるが、それはこうした事実を反映している。

(注1) 1982年11月現在でオイル・パーム入植地は FELDA 担当官の情報によれば200近くに達している、と予測されるが、そのうちブロック・システム実施入植地が比較的少ないのはⅡの(注1)で述べたごとく、入植地の開発に時間を要するからである。ゴム入植地では現在、3カ所でブロック・システムが採用されているが、将来11カ所まで増加する予定といわれる。しかし FELDA 当局はブロック・システムの採用はオイル・パーム入植地に限定し、ゴム入植地ではこれ以上のブロック・システムの導入は考えていない。

(注2) 入植者は入植地開発に要した一部資金を、収穫作業開始後ある程度の収入が保障されるようになった段階で、返済し始めねばならない(返済期間15年)。しかし、ブロック・システムの場合返済が完了しても入植者は作業区の土地に対して私的所有権は認められない。代わりに入植地ごとに入植者全員による協同土

地所有権(koperasi milik tanah)が認められることになっている。各入植者個人の作業区の間境界線が測量されないのはそのためである。これに反し、ブロック・システムを採用していないスンゲイ・クラ(Sungei Klah)のゴム入植地では各作業区ごとに境界線が測量され、各入植者の作業区の面積が入植地事務所で確認できる仕組みになっている。

FELDA は将来、ゴム入植地を含めて返済金支払い終了後は入植地をできるだけ協同組合方式による経営型態に変え、土地所有の型態も私的所有に基礎をおくのではなく入植者の協同土地所有型態に変換していく考えといわれる。すでにこの構想はジョホール州のパシール・ラジャ(Pasir Raja)入植地(オイル・パーム)で実施されている。ここでは入植者は全員協同組合員として入植地の作業区を「株」として所有し、その作業区を栽培し収入を得る権利を有することが認められている。しかし、入植者の保有する地権証書には作業区の土地売買、抵当、質入れ等は州政府の承認を必要とすると記載されている。また土地所有権の種類も99年の期限付所有権(suratan hakmilik tanah—leasehold)となっている。

詳細については *Undang-undang Kecil Koperasi Milik Tanah Rancangan FELDA Pasir Raja Berhad* (パシール・ラジャ FELDA 計画土地所有協同組合細則)、*Koperasi Milik Tanah Rancangan FELDA Pasir Raja Berhad*, 1981年を参照されたい。

なお、この協同組合土地所有方式に対する新しい動きとして、1983年6月13日の *Utusan Malaysia* 紙(有力なマレー語新聞の一つ)は、パシール・ラジャ協同組合加入者128人のうち112人がすでに脱退届けを出したことを報じている。脱退理由は協同組合規約のうちいくつかの条項について反対だからだとしているが、記事内容からして入植地の協同組合土地所有方式に強い不満を持っていることが主要な脱退理由であることは明らかである。脱退者はパシール・ラジャ FELDA 入植者土地所有権管理組合(Koperasi Pentadbiran Milik Tanah Peneroka FELDA Pasir Raja Berhad)を別個に設立する準備を進めているといわれる。

(注3) 隣接するトゥロラック・スラタン入植地でも upah kerja システムが採用されているが、あるブロックでは房果収穫作業に対する賃金率が20¢では安すぎると不満を訴える入植者と現状維持の入植者の2派にわかれ、激しい討論が深夜まで続けられていた。

結局、1 房果当り50¢の賃金率によると決定されたがこのブロックではこうした房果収穫作業の賃金率の変更はしばしば行なわれていると言われる。

IV 入植者の所得水準

これまでブロック・システムのもとでトゥロラック・ウタラ入植地の所得配分がいかなるメカニズムで決定されるかをみてきたが、それでは一体入植者は毎月どのくらいの所得を現実を得ているのであろうか。それを調査入植地での資料をもとに計算してみたのが第18表である。一般に FELDA の入植者の所得水準は表中の FELDA 段階の入植者 1 人当り純所得額で示されることが多い。FELDA 当局のみならず研究者が論文中に引用する場合も上記数字を用いるのが普通で、これが FELDA 入植者の高所得水準説の根拠にもなっているのである(注1)。しかし、これにはいくつかの問題がある。たとえば、入植者の純所得は粗所得からどのような費目が控除されて計算されるのであろうか。また粗所得はどのような方法で算出さ

れるのであろうか。さらに FELDA 渡しの純所得からブロック段階で入植者が受けとる最終受取り所得までに、どのような諸費用がどの程度差し引かれ、どのくらいの額が実際に入植者の手に渡っているのであろうか。これまで、ほとんどの研究者は最終受取り所得にいたるまでの諸掛り控除のプロセスの吟味を無視して、単に FELDA 段階で計算した 1 人当り純所得額に依拠し、高所得水準説を説いていたといえる。FELDA 入植者の所得水準は確かによくいわれるように一般の農民と比較して高い。どこの家庭にも TV セットはあるしバイクもあり自動車も決して珍しくない。また家屋の新改築もごく普通に行なわれている。しかし、FELDA 入植者の所得水準は一体どのくらいなのであろうか。単に FELDA が計算した 1 人当り純所得を彼らの実際の所得・生活水準と考えてよいのであろうか。ここでは FELDA 当局のコンピュータによる所得計算からブロック・レベルに至るまでの所得計算の過程を分析しながら、そこに潜む問題点をいくつか指摘し、現実の入植者の

第18表 入植者の所得水準と諸掛り (トゥロラック・ウタラ入植地)

(単位: マレーシア・ドル)

年 月	FELDA 渡し所得水準(1 人当り平均)					入 植 事 務 所 渡 し 所 得		ブロック渡し所得		総入植 者 数	入植事務 所および ブロック 諸 掛 り 計*
	粗所得	開発返 済金と 積立金	純所得	買掛返済 金とその 他諸掛り	受取り 所 得	入植地 諸掛り	受取り 所 得	ブロック 諸 掛 り	受取り 所 得		
1980年 8 月	951.24	363.63	587.61	263.70	323.91	32.18	291.73	77.43	214.30	465	109.61
9 月	891.34	357.30	534.04	263.30	270.74	24.61	246.13	62.42	183.71	465	87.03
10月	688.06	336.57	351.49	248.60	102.89	8.40	94.49	30.72	63.77	471	39.12
11月	777.71	366.39	411.32	278.77	132.55	4.81	127.74	28.86	98.88	470	33.67
12月	883.09	383.78	499.31	307.96	191.35	7.05	184.30	46.43	137.8	471	53.48
1981年 1 月	896.67	370.37	526.30	302.74	223.56	11.72	211.84	49.95	161.89	471	61.67
2 月	937.46	366.53	570.93	283.85	287.08	14.19	272.89	50.66	222.23	471	64.85
3 月	599.53	179.37	420.16	238.48	181.68	34.22	147.46	32.79	114.67	471	67.01
4 月	743.94	190.26	553.68	239.59	314.09	42.06	272.03	47.33	224.70	471	89.39
5 月	740.92	183.83	557.09	240.34	316.75	43.26	273.49	44.17	229.32	480	87.43
6 月	999.19	184.22	814.97	245.67	569.30	30.38	538.92	45.74	493.18	480	76.12
7 月	1,105.64	184.22	921.42	295.90	625.52	—	—	—	—	480	—

(出所) トゥロラック・ウタラ入植地, FELDA 事務所資料より計算, 作成。

(注) * 8～6月の11カ月平均は69.94ドル。

第19表 入植者1人当りの粗所得額算出事例

(第1開発地区・第3ブロック、
トゥロラック・ウタラ入植地、
1982年5月分の事例)
(単位: マレーシア・ドル)

	項 目	額
1	ブロック粗所得額*	21,383.36
2	ブロック共同維持費	5,614.53
内		
(1)	房果運搬費(12ドル/トン)	1,533.47
(2)	肥料購入積立金(18ドル/エーカー)	3,687.83
(3)	農園維持諸雑費(実 費)	134.54
(4)	農道維持・管理費(1ドル/エーカー)	197.30
(5)	入植者開発基金(45セント/エーカー)	61.39
3	ブロック純所得額合計(19人分)	15,768.83
4	ブロック内入植者1人当り配当額	829.94
5	粗所得額(配当額+賃金部分)	829.94+ (賃金部分)

(出所) *Potongan-potongan kepada Pendapatan Kasar Peneroka—Rancangan Kelapa Sawit bersistem Blok, Felda* [入植者粗所得内訳—ブロック・システムによるオイル・パーム計画, FELDA]。この資料は FELDA の職員研修用資料として用いられているもので、筆者が係官とのインタビューで若干の修正を加えている。

(注) *本来ならば賃金部分を控除したブロック総売り上げ額というのが正しい用語と思われる。しかし、ここでは FELDA の所得計算法にしたがいブロック粗所得額なる用語をそのまま使用している。

所得・生活水準を判断するための素材を提示してみたい。

まず FELDA で採用されている入植者1人当りの粗所得額の算出方法から吟味することにしよう。入植者の所得計算の基礎単位はブロックであるから、入植者の粗所得額もブロックによって異なる。FELDA は最初にブロックの総売り上げ額(総産出量×単位当り販売価格)を計算し、そこから upah kerja システムを採用している入植地の場合は入植者全員の賃金部分を差し引いてブロック粗所得額を算出する。各入植者の粗所得額はブロック粗所得額からさらに五つの共通費目を差し引いてブロック純所得を出し、それをさらに入植者数で除して得られた額、つまり配当額 (dividend) に賃金部分をプラスすることによって得られる。

FELDA で upah kerja システムを採用しているオイル・パーム入植地は現在24カ所であるから、これ以外のオイル・パーム入植地では粗所得額=配当額ということになる。

因みにトゥロラック・ウタラ入植地第1開発地区・第3ブロックの事例をみると(第19表)、ブロック粗所得額が2万1383.36^{ドル}で共通維持費5614.53^{ドル}を引いた額1万5768.83^{ドル}がブロックの純所得と計算されており、これをブロック構成員19人で割って得られた数字829.94が当該ブロック入植者1人当りの配当部分となっている。ところで、第19表のなかでもっとも注意すべき重要なことは、5項目の共同維持費のうち65.7%を占める肥料購入費積立金であろう。肥料購入費積立金は入植者1人当り180^{ドル}が毎月の所得より差し引かれることになっている。1981年2月まではこの肥料購入積立金は各入植者が毎月 FELDA に返済する開発返済金とともに、各入植者の粗所得額から差し引かれていたが、1981年3月よりブロック共通維持費目の一つとしてブロック粗所得より一括して源泉徴収されるように変更されたのである(第18表参照)。こうした変更は入植者がかねて FELDA が入植者個人の粗所得額から肥料購入積立金を差し引くことに強い不満を訴えていたのを鎮静化するために行なわれたものであるといわれる。

1 エーカー当り18^{ドル}の肥料購入積立金は年間に1入植者当り2160^{ドル}の多額に達する。この額は1980年度の FELDA オイル・パーム入植地全体の1人当り月平均所得額708^{ドル}(注2)の3倍以上にも相当する額であり、いかに入植者にとって大きな額であるかがわかる。入植者がこの多額の肥料購入代金を自分の所得から半ば強制的に差し引かれることに不満を感じるのはある意味では当然といえる。しかし、オイル・パームは非常に施肥感度

の高い農産物^(注3)で入植者が施肥をおこたると直接生産高だけでなく彼らの所得にも影響を及ぼす。FELDA はこのことがさらに入植者からの円滑な開発返済金の徴収に悪影響をおよぼすことを恐れたのである。返済金未払いの累積は FELDA の入植土地開発機関としての存立基盤をゆるがしかねないし、マレーシアでは農民の貸付金未払いが原因で農業計画が挫折せしめられる例が実に多い。こうした文脈から判断すると、肥料購入費積立金の徴収を入植者の眼からそらし、ブロック共通維持費目に入れて所得計算上の処理をする FELDA の措置もまた理解できるのである^(注4)。

肥料購入費積立金の問題はこのほかにもある。それは肥料購入価格が年々高騰し、1 エーカー当り18ドルの積立金では足りず、追加積立金の支払いが要求されるケースが多くなっていることである。たとえば、第19表に見られる肥料購入積立金3687.83ドルのうち136.43ドルは追加積立金なのである。一般に入植者は施肥作業に熱心でなく、できるだけ FELDA のガイド・ラインを無視して施肥量を抑えようとする傾向がある。そうした入植者の態度に押されて施肥量は入植地ごとに異なるのが実際である。また肥料輸送費も入植地の遠近によって異なり、実際の支払い額が年間肥料購入費積立金2160ドルに達しない入植地もある。その場合は余った額の半分を入植者に返し、残り半額を翌年の積立金に廻すことになっている。しかし、こうした事例はごく稀で一般には最近の肥料購入価格の上昇の影響で、積立金の追加支払いを強いられ入植者にとって大きな負担となっている。

さて、粗所得額が算出されるとつぎに入植者は開発費返済金およびオイル・パーム植え替え積立金等4項目の費用が差し引かれ、ここで初めて入植者の純所得額が得られる(第20表)。純所得額算

第20表 入植者1人当り純所得額算出事例

(第1開発地区・第3ブロック、
トゥロラック・ウタラ入植地、
1982年5月分の事例)
(単位: マレーシア・ドル)

項	目	額
I	年間総合諸掛り ¹⁾	8.71
II	入植開発費返済金	154.15
III	オイル・パーム植え替え積立金 (3.34ドル/エーカー)	33.40
IV	FELDA の返済滞納金 ²⁾	—
	合計	196.26
	純所得額=粗所得額-(I+II+III+IV)	633.67+(賃金部分)

(出所) 第19表と同じ。

- (注) 1) Consolidated Annual Charges (CAC) と呼ばれるもので、諸掛りのうちには州有地譲渡支払い金 (premium) と地代 (quitrent) が含まれ、FELDA を通して州政府に支払われる。大体、毎月10ドル前後であるが、入植地によってことなる。
- 2) FELDA への滞納金があった場合には、粗所得額から最低月間生活保証 300 ドルを差し引いた残りの半額より支払われることになっている。

出にあたって留意すべき重要なことは、入植者は月間最低 300ドルの純所得が保証されていて(この額はインフレの影響でしばしば変更される)、まず粗所得額829.94ドル+賃金部分から 300ドルが控除され、残り529.94ドル+賃金額が諸費用差し引きの対象になることである。もし粗所得額が 300ドルに満たない場合には費用はいっさい控除されず、逆に FELDA によって不足分が補なわれ、入植者に300ドルが支払われることになっている。粗所得から差し引かれる諸費用のうち注意しなければならないのはオイル・パーム植え替え積立金であろう。オイル・パームは通常、25~30年採取可能であるが、そのあとは植え替えを行なわねばならない。植え替え費用は入植者にとって膨大な額に達するため前以て積立金として植え替え資金を留保しておくわけである。ゴムの場合はゴム輸出税のなかにゴム植え替え積立金が含まれ、それが生産者たるエ

ステートまたはゴム小農に植え替え補助金として還元される仕組みになっているが、オイル・パームの場合にはそうした輸出税は課せられていない。したがって、FELDA のゴム入植地では植え替え積立金の徴収は行なわれておらず、オイル・パーム入植地の入植者のみが植え替え積立金を徴収されているのである。

開発費返済金の内容は入植者の住んでいる住宅建設費と農園開発に要した費用（1人当り10エーカー）のみであって入植地内の事務所、道路、公共施設等々の社会資本と職員人件費を含む FELDA の運営にとって必要な行政管理費はいっさいこのなかに含まれていない。15年返済（利率6.25%）で毎月平均 180ドルの返済額であるが、実際は入植地によって入植開発事業年次がことなるためかなりの差はある。また同じ入植地内でも開発地区ごとにことなる。これは同じ入植地内でも入植時期が遅くなるほど、同面積の農園開発に要する経費が少なくて済み、返済額も少なくなるためである。

ところで、純所得額がそのまま入植者の受取り所得になるわけではない。入植者はさらに家屋新築貸付金返済やイスラム聖地巡礼積立金 (Tabung Haji) 等の諸費目が FELDA 段階で差し引かれる。これら諸費用は13項目にわたるが、これまでの共通経費とことなり、差し引かれる費目範囲と額は入植者個人によって大きくことなる。事例を示すと第21表のごとくである。表中の13項目のうち重視しなければならないのは協同購買組合買い掛金返済額である。FELDA の関連下部組織である協同購買組合 (PNF, Perbadanan Niaga FELDA, 1978年) は遠隔の入植地に日用生活品を供給するために設立され、現在どの入植地でも多くの入植者に利用されている。入植者は購買組合から毎月

第21表 FELDA渡しの入植者受取り所得算出事例

(第1開発地区・第3ブロック、
トゥロラック・ウタラ入植地、
1982年5月の事例)

(単位: マレーシア・ドル)

	項 目	額
1	入植者開発積立金	1.00
2	FELDA 宿舍費 (FELDA 経営の学校に入学した子弟, (1人25ドル))	—
3	家屋新築貸付金返済	—
4	協同購買組合買掛金返済(第1)	250.00
5	家庭蔬菜栽培促進貸付金返済	—
6	入植者開発委員会会費	5.00
7	入植地協同組合費 ¹⁾	13.00
8	イスラム断食明け祝祭日支度金返済	—
9	水道費	—
10	イスラム聖地巡礼積立金	—
11	宿泊費滞納未払い分返済	—
12	協同購買組合買掛金返済(第2) ²⁾	—
13	FELDA 入植者協同組合費	15.00
合計		284.00
14	FELDA 渡し入植者受取り所得額=純所得額-(1+2+……+13)	349.67+(賃金部分)

(出所) 第19表と同じ。

(注) 1) トラクター、ローリーの購入、共同使用調整業務を行なう。

2) 粗所得額の水準が十分でないとき協同購買組合買い掛金の返済が延期されることがある。協同購買組合買掛金返済(第2)というのはその延期された部分の返済金を示す。

一定限度額買い掛けすることが許されているが、その上限額は入植者、購買組合および入植事務所の三者によって協議、決定され入植地によってことなる。たとえば調査地トゥロラック・ウタラ入植地では上限買い掛け額は1家族当り250ドルであったが、200ドル、300ドルの入植地もあるという。購買組合で売られている日用品雑貨類はどれも町で売られている場合より若干高くなっているが、買い掛けの便と地の利を得てほとんどの入植者は上限一杯まで借り、翌月差し引かれている。その意味では多くの入植者の生活、家計は翌月分の所得の前借りに大きく依存しているとも言える。したがって、FELDA 段階での入植者の受取り所得額は純所得額よりかなり低くなっている。

しかし、入植者の実際の受取り所得はさらにこ

第22表 入植地、ブロック段階における諸掛り差し引き事例

(第3開発地区・第1ブロック, トウロラック・ウタラ)
入植地, 1980年2月の事例

(単位: マレーシア・ドル)

入植者	(1) FELDA からの 受取り所得	(2) 入植地段階 諸掛り	(3) 入植地段階 受取り所得	(4) ブロック段階 諸掛り	(5) ブロック段階 房果調整額	(6) ブロック段階最 終受取り所得	(7) (2)+(4)+(5)
A'	298.56	67.00	231.56	30.70	+ 3.39	204.25	94.31
B'	300.53	22.50	278.03	30.70	+ 7.29	254.62	45.91
C'	333.30	28.50	304.80	36.70	+31.29	305.39	27.91
D'	296.04	27.00	269.04	34.70	- 1.41	236.93	59.11
E'	398.59	—	398.59	30.70	+30.39	398.28	61.09
F'	392.61	12.00	380.61	46.70	+27.69	373.60	19.01
G'	272.47	25.00	247.47	154.20	-11.01	82.26	190.21
H'	437.52	31.00	406.52	34.70	+ 8.79	384.61	52.91
J'	287.76	22.00	265.26	34.70	-23.61	206.86	80.81
K'	349.10	4.00	345.10	34.70	- 4.29	318.69	30.41
L'	296.43	25.00	271.43	34.70	-16.41	224.32	72.11
M'	306.34	25.00	281.34	34.70	- 7.11	239.53	66.81
N'	291.10	22.50	268.60	30.70	-12.81	225.09	66.01
O'	466.88	22.50	444.38	34.70	-57.51	352.17	114.71
P'	292.09	23.00	259.09	42.70	-10.41	213.98	78.11
Q'	304.31	26.50	277.81	34.70	+ 5.49	252.60	51.71
R'	356.75	22.50	334.25	30.70	+11.79	315.34	41.41
S'	411.35	23.00	378.35	30.70	+18.09	375.74	35.61
T'	288.62	27.00	261.62	30.70	-17.31	213.54	75.08
U'	306.75	43.00	263.75	30.70	+18.09	251.14	55.61
V'	288.53	58.50	230.03	30.70	- 8.91	190.42	98.11
合計	6,975.63	568.00	6,407.63	830.20	(+)166.59 (-)166.50	5,619.36	1,356.27
平均	332.17	27.05	305.12	39.53	(+) 7.93 (-) 7.92	267.59	64.58

(出所) 第3開発地区・第1ブロック, トウロラック・ウタラ入植地内部資料より作成。

のあと、入植地事務所段階およびブロック段階での諸雑費控除や罰金料等があり、FELDA 段階の受取り所得より一層低くなるのである。入植地事務所およびブロック段階での諸雑費控除額がトウロラック・ウタラ入植地全体でどのくらいの額に達するかは第18表で理解できるが、より具体的に第3開発地区・第1ブロックを例にとって見てみよう(第22表)。FELDA 段階渡しのブロック平均受取り所得額は332.17ドルとなっているが、入植地事務所の段階では諸掛り1人当たり平均27.05ドルが差し引かれ、入植地受取り所得額は平均で305.12ドルになっている。事務所段階で差し引かれる1人当たり平均諸掛り額27.05ドルの内訳は殺虫剤、除草剤購入費と撒布用機具賃貸料および宗教

学校学費と幼稚園費の3費目であるが、ほとんどが殺虫剤、除草剤購入費と撒布用機具賃貸料によって占められ全体の92.6%に達している。肥料はFELDA 自身が調達購入して入植者に販売するが、殺虫剤、除草剤の購入は入植地事務所あるいは入植者開発組合が購入の窓口になっているのが普通である。しかし、なかにはブロック別にまた数人グループ別、個人別に外部より直接購入している例も見ることができた。しかし、トウロラック・ウタラ入植地では入植者開発組合がほとんど入植地事務所を代行して殺虫剤と除草剤の掛け売りと回収の事務を処理していた。

最後にブロック段階での諸掛りの内容を見てみよう。ブロック段階での諸掛りの費目はほとんど

が共通費目であるが、その内訳をみるとブロック費 (5.00^{ドル})、ブロック委員会運営費 (5.24^{ドル})、ブロック長手当費(4.52^{ドル})、婦人会会費(1.20^{ドル})、モハammad聖誕祝日共食会費 (7.72^{ドル})、房果集荷人雇用費 (追加, 5.52^{ドル})、アフガニスタン 救援費 (0.50^{ドル})、UMNO (United Malays National Organization, 統一マレー国民組織) 支部費 (1.00^{ドル})となっているが、いずれもその額は比較的少額である。これら共通費目のうち重要なのはブロック長手当費と房果集荷人雇用費であろう。ブロック長手当費というのはブロック長は通常、収穫作業期においてブロックの全入植者の収穫房果個数を個別に確認、記録する仕事に従事するため、自ら収穫作業に従事できず雇用労働者を利用するのが一般であり、その雇用費をブロック構成員が平等に負担する費用をいう。集荷人雇用費とは収穫された房果をトラクターまたはローリーに積み、入植地内の精油所まで運搬するために雇用された労働者に支払われる費用をさす。集荷人はトラクター運転手と道端に集められた房果をトラクターに積む (loading) 労働者の2人よりなるが、通常、積み込みには入植地の外に居住するより貧しい農民が雇用されることが多いようである。トゥロラック・ウタラ入植地には積み込み労働に従事する労働者の粗末な仮設長屋(5軒)が建てられ、常時労働者が住んでいた。

ブロック諸掛りのうち個人費目は少なくブロック貸付金返済、罰金、房果売買調整額が主なものであるが、額としては共通費目より多く差し引かれる入植者が多い。たとえば入植者 G' は収穫作業怠慢により119.50^{ドル}の罰金科料を受け、最終受取り所得額はわずか82.26^{ドル}にすぎない。またブロックの平均受取り所得額は267.59^{ドル}と政府が現在、貧困線として規定している貧困所得水準 300^{ドル}を

下回っている。第18表においてもブロック段階の最終受取り所得額が300^{ドル}を超えている月(1980年8月~81年7月)は一度もなく、入植地事務所およびブロック段階の諸掛り控除額の大きさを物語っている。

さて、これまで FELDA の計算方法にしたがい FELDA 段階からブロック段階まで、入植者の最終受取り所得に至るまでの諸費用控除過程を分析してきたが、ここで注意しなければならないのは FELDA による純所得算出後に入植者協同組合費、殺虫剤および除草剤購入費、ブロック長手当費、房果集荷人雇用費等々の生産費が控除されていることである。生産費は協同購買組合買い掛け返済金やイスラム聖地巡礼積立金、モハammad聖誕祝日共食会費など入植者の家計から支出される消費費目または貯蓄部分とは本質的にことなる。したがって、入植者の実際の純所得額は現在 FELDA が計算する純所得額より、これら諸生産費を控除したものととして計算されねばならないと考える。つまり、入植者の純所得額の水準はブロック段階の最終受取り所得額+協同購買組合買い掛け返済金+その他消費費目控除の合計費に相当すると判断される。要約して言えば、トゥロラック・ウタラ入植地の実際の所得水準は FELDA 段階の平均純所得額を基準にさらに、つぎの三つの要素を考慮に入れて判断しなければ、実態を反映したことにならないと考える。

第1は上に述べたように純所得算出後に控除されている生産費の問題である。第18表から1980年8月から1981年6月までのトゥロラック・ウタラ入植地全体の事務所段階およびブロック段階の諸掛り合計額は 69.94^{ドル}に達する。また第22表を見ると1980年2月の第3開発地区・第1ブロックの諸掛り合計額は 64.58^{ドル}に達しているが、これら

諸掛りのうちの多くの部分が生産費と見なされるものである。また FELDA 純所得額から FELDA 渡しの入植者受取り所得額を算出する場合にも、その控除費目のなかに生産費目を見ることができ(第21表参照)。これら統計的事実から判断すると、概算して毎月平均して60~70ドルが生産費として純所得算出後も控除されており、その分だけ FELDA 計算の純所得水準は割り引いて考慮されねばならないであろう。

第2は所得再配分の仕組みである。FELDA で計算された入植者の単純平均所得額からはブロック内部での房果売買システムや罰金制度を通じた所得配分メカニズムの効果と実績に対する評価は入ってこない。しかし、ブロック・システムのもとにおける入植者の所得ないし生活水準に対する評価、分析は入植者間における所得再配分過程の実態把握なくしては正確を期し難いであろう。

第3は入植地内の非農業所得および入植地外所得の存在である。入植地内では雑貨店、コーヒー店、牛飼育等の兼業(第10表参照)収入はかなりの額に達していると推測されるが、その数値は必ずしも明らかになっていない。また、入植者のなかには入植地のそとで日雇労働または商業に従事しているものもいる。しかし、これら入植地外就業者の収入の実態も FELDA によって把握されていない。いわば、ブロック・システムのもとでコンピュータ計算されるオイル・パームからの収入以外の兼業収入を入植地事務所はまったく掴まえていないのである。トゥロラック・ウタラ入植地全体の所得水準を詳しく分析するにはこれら個々の入植者の兼業収入の実態調査も必要であろう。

(注1) Jamaludin bin Lamin, "Land Development and Agriculture," シンポジウム "The State of Malaysian Agriculture——A Critical Review," Agri-

cultural Institute of Malaysia, 1982年8月12~14日にはつぎのような FELDA 入植者の所得統計が載っている(28ページ)。

	ゴム入植地1人当り平均 純所得額 (マレーシア・ドル)	オイル・パーム入植地1人 当り平均純所得額 (マレーシア・ドル)
1976	340	514
1977	370	573
1978	398	804
1979	482	831
1980	472	709
1981	492	643
平均	426	679

(注) 執筆者 Jamaludin bin Lamin 氏は現在、FELDA の2人いる副理事 (Deputy Director-General) の1人である。

(注2) *Annual Report, FELDA, 1980.*

(注3) Jamaludin, 前掲論文, 29~30ページ。オイル・パームは平均すると1エーカー当り年間700~900kgの施肥量を必要とするといわれるが、肥料のうち窒素とカリに感度が高く多量の投肥を要する。

(注4) 同上。1977年から81年までにマレーシアが輸入した肥料(尿素、窒素、磷酸塩、カリ、その他)の加重平均価格指数は1977年を100とすると81年は154.23となっている。つまり、54%の肥料価格の上昇がこの4年間で見られるのである。特にオイル・パームが必要とする非尿素系窒素(non-urea nitrogen)は1トン当り同期間中に212ドルから444ドルと倍以上になっている。オイル・パーム入植地において入植者が FELDA 肥料購入積立金の徴収処理の仕方に不満を抱き、訴えるようになった背後にはこのような国際的な肥料輸入価格の高騰があったことを見逃してはならない。

V 要約と問題点

これまで、トゥロラック・ウタラ入植地で現在実施されているブロック・システムの基本的枠組について、かなり詳細にその実態を分析してきたが、その内容は概略、(1)栽培作業の組織化と協業化、(2)賃金、配当の2本立てによる所得配分の仕組み、(3)罰金制度、(4)房果売買システムの四つに整理することができよう。では一体こうした内容と特質を持つブロック・システムを実施せしめている基本的要因は何んであろうか。以下、仮説的

に所見を述べてみたい。

まず第1に考えられるのは、オイル・パームの植物としての特性とその加工処理上の技術的制約であろう。オイル・パームの房果は収穫の適期を失すると房果内の油脂がすぐ酸化し、精製油の品質低下を招くため、適期収穫された多量の房果は迅速に資本集約的な大規模精油装置 (crude oil mill) によって処理される必要がある。こうしたオイル・パームの植性と加工技術上の制約はつぎに当然、房果の適期収穫と大規模集荷さらに迅速な運搬を可能にする栽培作業の組織編成化を要請することになる。オイル・パーム入植地ではゴム入植地に見られるような土地の私的所有が認められず、代りに各入植者に10エーカーの作業区があたえられ、彼らを20人前後の単位にグループ分けしブロック編成しているのは上記のような理由からである。つまり、各入植者はブロックを単位として各自の作業区で日程化された組織的かつ協業的な栽培作業に従事することが要求される。特に収穫労働において作業の同時協業性が強調されるのは大量の房果収穫物の効率的な運搬とその加工処理にとって不可欠だからである。

作業区に私的土地所有権を認めれば、諸作業の同時協業性はほとんど期待できないばかりでなく、収穫作業を入植者個人が自由勝手に、個別分散的に行なうことを認めることになり結果として房果の適期収穫と高品質の精油加工が困難となるのである。

ところで、ここで一つ注意しなければならないのはブロック内栽培作業において入植者は同時的協業性が要求されるが、いわゆる分業による協業は収穫房果個数の計算と記録、集荷、運搬といった2～3の労働過程にすぎないことである。残りのほとんどの作業は単純協業の形で行なわれるの

である。こうした点から言えば、ブロック・システム内の栽培作業の組織編成形態は作業区の私的所有でなく共同所有を前提とし、同一規模の作業区を同一栽培技術によってあくまで各入植者の個別的、同時的作業に依存しながら、全体としての栽培作業の組織性と協業性を成立せしめようとしている点にその特質ないし目的があるといえよう。

第2にブロック・システムの基本的枠組を構成、実施せしめている要因として考えねばならないのは、マレー人伝統村落社会にみられる生産行為の非共同性と非組織性であり、それに強く根ざしている農民の個別分散性である^(註1)。オイル・パーム入植地の栽培作業は確かに技術的、組織的観点からすれば、FELDA がその初期に実施したような分業による協業に基礎を置いた集団型栽培方式がより適した栽培方式であろう。しかし、伝統村落社会出身の入植者はそうした高度に組織化、協業化された労働組織や一律配分的な所得配分システムになじめず拒否反応を示したものと思われる。入植者の私的土地所有を否定しながら、入植者個々人に個別の作業区を設定せざるを得なかったのも、農民が私的土地所有制に基礎をおく伝統村落社会のなかで長い歴史を通じて身につけてきた個立分散的な作業意識がオイル・パーム入植地のなかでも払拭しきれなかったからであろう。また、入植者個人の生産性に応じた所得配分の仕組みを賃金支払いシステムや房果売買システムさらに罰金制度といった形で、一律配分的平等主義の傾向の強い所得配分制度のなかに導入せざるを得なかったのも、同じような文脈の延長線上で理解できるのである。

こうした意味から言えば、ブロック・システムは第1と第2の要因、つまりオイル・パームの適期収穫の必要性和資本集約的な巨大加工処理技術

が要求する集団型栽培方式および、入植者の個別分散的な自立自営志向との妥協のうえに成立している組織といえる。

つぎに第3に、ブロック・システムを円滑に実施するうえで重要な役割を果たし、無視できないものとして FELDA の入植者に対する強い管理および保護機能をあげることができよう。巨額な国家資金を投資してきている FELDA は入植者に一定の所得水準を実現させながら、投資した開発資金を入植者から円滑に回収することが何よりも政治的、経済的に要請される。そして、そのためには FELDA は入植実施機関としての存立目的に沿った形で入植地と入植者を管理、コントロール、組織化せざるを得ない立場にあるといえる。栽培作業の日程表の作成から日々の栽培作業の監督と指導、肥料購入、賃金と配当のコンピュータ計算、ブロック内会計処理の監査、協同組合の監督等にほとんどすべての入植者の経済活動(時には社会、政治活動)(注2)を必要に応じて監督、指導しさらに事務処理といった実務にいたるまで管理掌握しているのはそのためである。

もっとも、FELDA では入植者の自治はできるだけ尊重され入植地を彼らの自治体として組織、運営することを奨励している。しかし、現在の段階では知識、経験、資金といった面から判断して全面的に入植者の自治を認める段階にはいたっていない。入植者の自治がさらに拡大し、定着するにはまだかなりの時間が必要であり、FELDA の管理とコントロールによる入植地経営がこれからも継続されていくことは明らかである。

しかし、こうした FELDA の管理的性格は私的企業による利益追求を目的とした管理とは本質的にことなる。FELDA では房果収穫のあとの加工処理から国内・国外販売、貯蔵倉庫による製品管

理にいたるまで FELDA の関連下部組織(subsidiary)がいっさい行ない、得られたすべての利益は入植者に還元されるシステムになっているのである。FELDA のオイル・パーム生産物の流通過程については実態調査を行なっていないので、組織的にどのような問題が存在するかは必ずしも十分に明らかでないが、ここでは私的資本の介入は阻止され入植者の利益が企業の私的利潤として流出しないように努力が払われている。その意味では FELDA は入植者の利益を保護するための巨大なサービス機関になっているといえる。要約すれば、FELDA 全体は入植者を私的資本の搾取から防ぐための巨大な国家的保護、サービス機関であると同時に、その保護、サービスを有効に実現するため、必要に応じ入植者を管理、コントロールする機能を兼ねそなえた機関であると規定できよう。そして、この原則はブロック・システムにおいて強く現われているといえる。

(注1) Horii, Kenzō, *Rice Economy and Land Tenure in West Malaysia—A Comparative Study of Eight Villages*, I. D. E. Occasional Papers Series, 第18号, 東京, I. D. E., 1981年, 35~36ページ, 166~167ページ, および Kuchiba, Masuo, その他共編, *Three Villages: A Sociology of Paddy Growers in West Malaysia*, ホノルル, University of Hawaii, 1979年を参照せよ。

(注2) 入植者開発組合(JKKR)の役員は入植者の互選であったが、1981年11月の役員選挙よりその方法が変わった。それまではブロック構成員がブロック長を選び、そのブロック長のなかから入植開発組合委員長を入植者が選んでいたが、11月よりブロック長のなかより3人の委員長候補を入植地事務所長およびその他数人の入植地内有識者が選択し、最終的に FELDA がそのなかより選出任命するように改革されている。

(アジア経済研究所海外調査員,)
(在クアラルンプール)